

# 中台 A 遺跡

— 一般国道409号道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 —

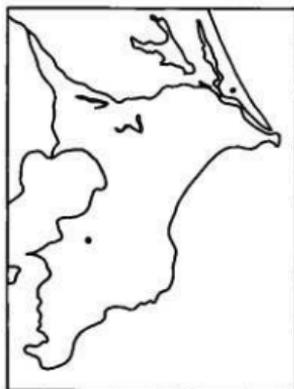
1 9 9 3

千 葉 県 土 木 部

財団法人 千葉県文化財センター

なか だい  
中 台 A 遺 跡

— 一般国道409号道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 —



1 9 9 3

千 葉 県 土 木 部  
財団法人 千葉県文化財センター

## 序 文

東京湾に面する木更津市は、房総半島の中央部に位置し、千葉県政治、経済、文化の一翼を担ってきました。現在、千葉県新産業三角構想に基づくかずさアカデミアパークをはじめとして、東京湾横断道路、東関東自動車道千葉・富津線などの大規模な整備事業が進められており、ますますの発展が期待されています。これらにともない、より一層の円滑な道路交通網整備事業の一環として木更津市から茂原市に至る国道409号線の道路改良工事が計画されました。この工事は木更津市笹子から同市椿に至る延長1,440mのバイパス工事ですが、この完成により、東関東自動車道や東京湾横断道路の完成にともなう交通混雑の解消に役立つものと思われます。

この周辺は小櫃川下流域に面し、古墳をはじめとする埋蔵文化財の密集地域として知られており、千葉県教育委員会では、事業地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、千葉県君津幹線道路建設事務所をはじめ関係諸機関と慎重に協議を重ねた結果、事業の性格上から現状の改変を避けられないと判断し、やむなく発掘調査を実施して記録保存の措置を講ずることとなりました。

発掘調査は、財団法人千葉県文化財センターが担当することになり、平成3年6月1日から10月31日まで発掘調査を実施しました。この結果、縄文時代前期の石器包含層や、古墳時代から歴史時代の墳墓群が発見され、このたび報告書として刊行するのはこびとなりました。

本書が学術資料としてはもとより、文化財の保護と普及のために広く一般の方々に活用されることを願っております。

最後に、発掘調査から報告書刊行にいたるまでご指導いただいた千葉県土木部道路建設課、千葉県君津幹線道路建設事務所、千葉県教育委員会、木更津市教育委員会をはじめ、地元関係諸機関各位のご協力にお礼申し上げますとともに、調査に協力された調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成5年3月

財団法人 千葉県文化財センター  
理 事 長 奥 山 浩

## 例 言

1. 本書は、千葉県木更津市笹子字下中ノ台28-1他に所在する中台A遺跡の発掘調査報告書である。遺跡コードは206-007である。
2. この調査は一般国道409号線道路改良工事に伴う事業として、千葉県教育委員会の指導のもとに、千葉県土木部道路建設課との委託契約に基づいて、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は平成3年6月1日から10月31日まで実施した。調査は技師福田誠が担当した。
4. 整理作業は平成4年6月1日から9月30日まで実施した。作業は主任技師福田誠が担当した。
5. 本書は調査部長天野努、調査部長補佐深澤克友、班長鈴木定明の指導のもとに福田誠が編集・執筆した。
6. 本書の作成にあたっては千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県土木部道路建設課、千葉県君津幹線道路建設事務所、木更津市教育委員会の関係各位をはじめ多くの方々の御指導、御協力を得たことを記して感謝の意を表します。

# 本文目次

序文

例言

目次(本文・挿図・表・図版)

## I 序章

1. 調査に至る経緯 ..... 1
2. 遺跡の位置と周辺の遺跡 ..... 1
3. 調査の概要 ..... 4

## II 先土器時代 ..... 7

### III 縄文時代

1. 遺構 ..... 10
2. 遺物 ..... 10
3. 縄文時代のまとめ ..... 27

### IV 古墳時代

1. 遺構 ..... 28
2. 遺物 ..... 32
3. 古墳時代のまとめ ..... 32

### V 歴史時代

1. 遺構 ..... 34
2. 遺物 ..... 43
3. 歴史時代のまとめ ..... 44

### VI 近世

1. 遺構 ..... 45
2. 遺物 ..... 49
3. 近世のまとめ ..... 52

### VII 時期不明 ..... 53

## 挿図・表目次

第1図	中台A遺跡周辺地形図	2
第2図	周辺の遺跡	3
第3図	調査区内グリッド設定図	5
第4図	先土器時代確認グリッド・セクション図	8
第5図	上層遺構全体図	9
第6図	003号跡平面図・セクション図	11
第7図	縄文時代土器片拓影図(1)	13
第8図	縄文時代土器片拓影図(2)	14
第9図	縄文時代土器片拓影図(3)	15
第10図	石器実測図(1)	18
第11図	石器実測図(2)	19
第12図	石器実測図(3)	20
第13図	石器実測図(4)	21
第14図	石器実測図(5)	22
第15図	石器実測図(6)	23
第16図	石器実測図(7)	24
第17図	005号跡平面図・セクション図	29
第18図	006、007号跡平面図・セクション図	30
第19図	012、018、019、037、039号跡平面図・セクション図	31
第20図	古墳時代遺物実測図	33
第21図	001号跡平面図・セクション図	36
第22図	008、009号跡平面図・セクション図・エレベーション図	37
第23図	011、014号跡平面図・セクション図・エレベーション図	38
第24図	015号跡平面図・セクション図	39
第25図	020、021号跡平面図・セクション図・エレベーション図	40
第26図	029、030、031号跡平面図・セクション図	41
第27図	038、040、041号跡平面図・セクション図・エレベーション図	42
第28図	歴史時代遺物実測図	44
第29図	002、022号跡平面図	46
第30図	004、010、016、023、025、026、027号跡平面図	47
第31図	045号跡平面図・セクション図・エレベーション図	48

第32図	素焼土器実測図	50
第33図	仏具等実測図	51
第34図	013、017、024、028号跡平面図・セクション図・エレベーション図	56
第35図	033、042、043、044号跡平面図・セクション図	57
第36図	032、034、035、036号跡平面図	58
第1表	石器計測表(1)	25
第2表	石器計測表(2)	26

## 図 版 目 次

図版1	遺跡透景・遺跡全景
図版2	遺跡全景(上から)
図版3	上層確認調査状況・調査風景・下層堆積状況
図版4	001号跡全景・周溝セクション・全景(上から)
図版5	002号跡全景・セクション・全景(上から)
図版6	003号跡遺物出土状況・全景・004号跡全景
図版7	005・006・007号跡全景
図版8	008・009・010号跡全景
図版9	011・012・015号跡全景
図版10	015号跡周溝セクション・018、019・020号跡全景
図版11	021・022・023号跡全景
図版12	024・025、026号跡全景・021、029、041号跡全景
図版13	037・038・039号跡全景
図版14	017・041・033、042、043、044号跡全景
図版15	045号跡全景・005号跡周辺・006号跡周辺
図版16	縄文時代土器片(1)
図版17	縄文時代土器片(2)
図版18	石器(1)
図版19	石器(2)
図版20	石器(3)
図版21	歴史時代土器・素焼土器・仏具等

# I 序 章

## 1 調査にいたる経緯

木更津市は古くから上総の国の中心地として発展し、千葉県の政治、経済、文化の一翼を担ってきた。近年では首都圏の急激な人口増加に伴う通勤圏の拡大等により、東京湾沿岸の工業地域のみならず、首都圏のベッドタウンとしての役割をも担っている。

これにともない首都圏道路整備の一環として、東関東自動車道千葉・富津線の建設が決定し、現国道409号線も東関東自動車道の袖ヶ浦インターチェンジへのアクセス道路としての役割が期待されたが、すでに飽和状態になっていた。そこで、木更津市笹子から同市椿に至る延長1,440mの笹子工区について前述の機能とともに、県道君津平川線と一体になってかずさアカデミアパーク構想推進の一翼を担う幹線道路の機能も併せもたせるために、昭和62年度に国道道路改良事業としてバイパス工事が事業化された。

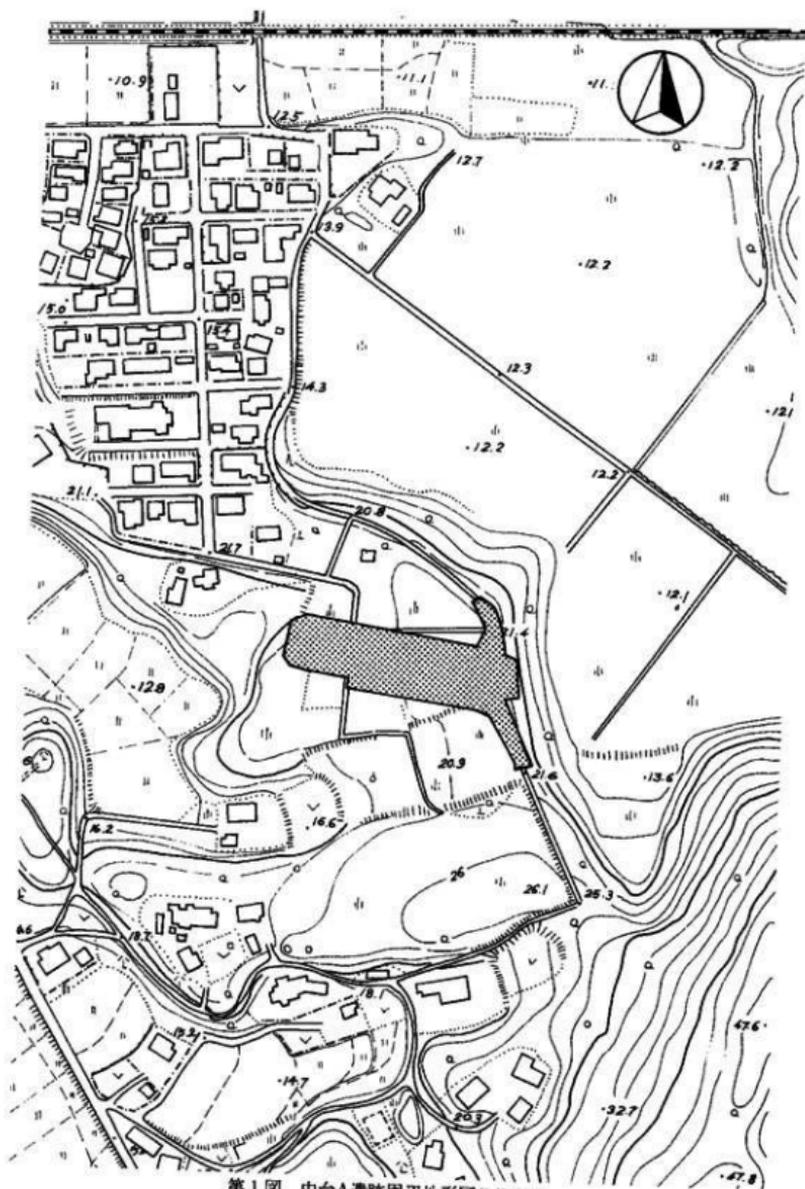
事業予定地内の埋蔵文化財の所在の有無については、千葉県教育委員会にその所在の照会があり、中台A遺跡が所在する旨を回答した。その回答に基づき県土木部道路建設課と県教育庁生涯学習部文化課との間で遺跡の取扱いについて協議が重ねられた結果、事業の性格上計画の変更および現状保存が困難なことから、中台A遺跡の2,980㎡について記録保存の措置を講ずることで協議がととのった。

その結果、教育庁生涯学習部文化課の指示により、調査機関として財団法人千葉県文化財センターが指定され、県土木部との間に調査委託契約が締結され発掘調査を実施することになった。

発掘調査は平成3年6月1日から10月31日まで実施した。整理作業は平成4年6月1日から9月30日まで実施し、報告書作成作業を終了した。

## 2 遺跡の位置と周辺の遺跡

中台A遺跡は木更津市笹子字下中ノ台地先の小櫃川下流南岸に所在する。東京湾に流入する小櫃川が狭い谷底平野を北上し、広い平野に出て流れを急に西に変えたところを眺めることのできるやせ尾根の先端部に位置している。このやせ尾根は笹子の台地を北西に向かって開析するいわゆる樹枝状谷によって削り出されているが、下層構造を反映し狭段で南西側が険しく、反対の北東側がやや緩やかで地下水の流れが多いのが特徴であるが、中台A遺跡の立地する最先端部分は景観を変えて、段丘となり、わずかな平場が形成されている。なお、調査区の背後、すなわち南東側はごく浅い支谷が埋没していることが先の君津都市文化財センターの報告からも知られており、厳密に言えば独立丘になっているので、高位から土砂の供給を受けにくい地形になっている。



第1图 中台A遺跡周辺地形図(1/2,500)



1. 中台A遺跡 2. 中台B遺跡 3. 内宮出遺跡 4. 谷本郷遺跡 5. 滝ノ口谷市遺跡 6. 滝ノ口向台遺跡  
 7. 橋古墳群 8. 四留作古墳群 9. 馬場作古墳群 10. 滝ノ口大作古墳群 11. 滝ノ口向台古墳群  
 12. 山崎古墳群 13. 芝野遺跡 14. 笹子城跡

第2図 周辺の遺跡

中台A遺跡の周辺には、古墳時代を中心に多くの遺跡が所在している。近年の区画整理、道路建設などによって発掘調査が多く行われ、考古学上の成果も増加している地域であるが、ここでは本遺跡と同時期の遺跡についていくつかを紹介する。

縄文時代では、標高20m前後の低位段丘に中台A遺跡(1)、中台B遺跡(2)、内宮田遺跡(3)、谷本郷遺跡(4)、滝ノ口谷市遺跡(5)など縄文時代全期の包蔵地が所在する。中台A遺跡では平成2年の君津都市文化財センターの確認調査と今回の調査で3軒の住居跡が検出された。標高40m以上では滝ノ口向台遺跡(6)の先端部で中期を中心に早期から晩期まで調査されている。

古墳時代には、やせ尾根上を中心に古墳群が形成されており、椿古墳群(7)、四留作古墳群(8)、馬場作古墳群(9)、滝ノ口大作古墳群(10)、滝ノ口向台古墳群(11)などが知られ、一大古墳群を形成している。中台A遺跡では、君津都市文化財センターの確認調査と合わせ9基の古墳が見つかり新たな古墳群となった。中台A遺跡に近い、やや低いところでは山崎古墳群(12)がある。一方該期の集落は台地上では滝ノ口向台遺跡や、岩崎遺跡などが知られている。低地の生産遺跡では芝野遺跡(13)、やや離れるが菅生遺跡が知られている。また中世では笹子城跡(14)が知られている。

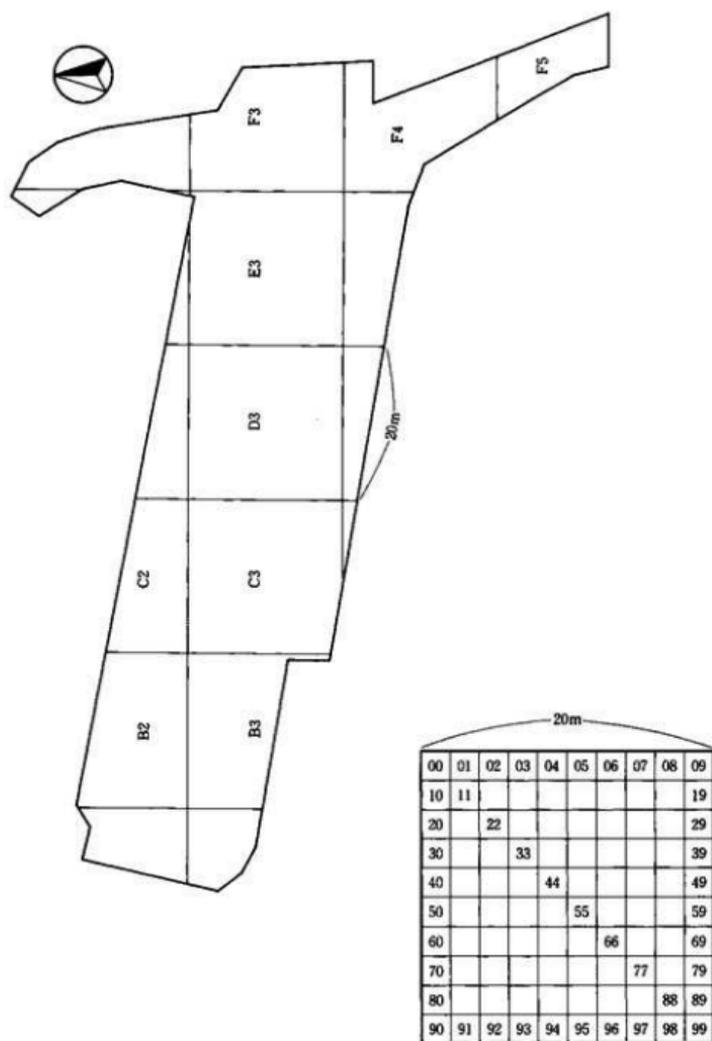
### 3 調査の概要

発掘調査は平成3年6月1日から始まった。現状は宅地造成の後、長く放置され篠竹が繁茂し松の立木等も茂っていたので、草刈り・伐採作業を行い、その後碎石を敷いて搬入路を確保し、補助員詰所を設置した。また調査区全域に公共座標系の方眼杭を20m四方に設置し、その20m×20mの方眼を大グリッドとしその北西端の杭の番号で命名した。更に2m×2mの小グリッドで100の方眼に区分した。

確認調査はグリッドに沿って設置した確認トレンチを人力で掘り下げた。これにより遺構の分布と調査区中央部の表土内に黒曜石の剥片を主体とする遺物包含層が確認された。

本調査は6月22日から行った。篠竹の根が多く、表土除去を人力で行うことが困難なところについてはバックホウ等の重機類を使用した。遺物を包含する部分については極力人力で表土の除去を行い、遺物の採集に努めた。包含層の遺物は2m×2mの小グリッドごとに取り上げを行った。遺構番号は調査順に001号跡、002号跡とした。10月20日にラジオコントロールの模型ヘリコプターにより空中写真撮影を行った。下層の確認調査は、上層調査中に上層遺構の底面などから白色粘土層が露呈したことや、表採品のなかに下層遺物が見当たらなかったことを考慮して確認トレンチを設定した。

下層の調査は確認調査で終了し埋め戻し作業、清掃作業、道具・機械・施設の撤収を行い、10月31日にすべての作業を終了した。



第3図 調査区内グリッド設定図

整理作業は平成4年6月1日から行った。遺物は基本的に各遺構、各グリッドごとに水洗・注記を行った。分類、復元を行った後、実測・拓本用の遺物を選別した。9月1日から原稿執筆に入り、並行して挿図の作成を行い、9月30日に報告書作成作業を終了した。

#### 参考文献等

『千葉県埋蔵文化財分布地図(3)』財団法人千葉県文化財センター 1988

『君津都市文化財センター年報9』財団法人君津都市文化財センター 1990

## II 先土器時代

中台A遺跡では、上層遺構調査中に深度のある遺構の底面から白色粘性土が認められたため先土器時代の遺構・遺物の存在する可能性は低いと考え、全体の面積の2%について白色粘土に到達するまで(30cm~50cm)調査した。さらに、確認トレンチ6か所についてのみ180cmほどまで掘り下げ、主に土層の堆積状況の観察を行った。その結果、遺構・遺物は検出されず、白色粘性土と白色粘性砂が互層に堆積するのみなので確認調査をもって終了することにした。土層図を第4図に示したが、遺跡の西側に暗黄色のソフトローム層と思われる層が薄く堆積していた。火山灰基の風化層であることはみとれたが立川ローム層のⅢ層に相当するものかは不明であった。当初はその下の赤褐色の粘性土もハードローム層と考えたが、断面観察によって下に続く白色粘性土が酸化・変色したものであることがわかった。

地形は前項でも触れたとおり厳密にいうと独立丘となっているので該期に降下した火山灰の多くがとどまることなく雨や地下水などによって流出し、また通常であれば後背の台地から流入して再堆積するはずの火山灰などがまったく供給されなかったため、このような地形を維持できたものと考えられる。言い換えれば15~2万年前のリヌーヴルム間氷期からヴルム氷期にいたる海面の上昇と下降の繰り返しによってできたとされる段丘が武蔵野ローム層や立川ローム層に覆われずに残った地形といえる。こういうことから、先土器時代から人の生活が営まれた可能性は否定できないが、遺構・遺物がその都度流出してしまった可能性が高い。同様の地形は市原市今富遺跡をはじめ内房沿岸のやせ尾根が沖積層の下に埋没する直前の低位段丘に見られる。やはり、同様に先土器時代の遺構・遺物は見つからない。

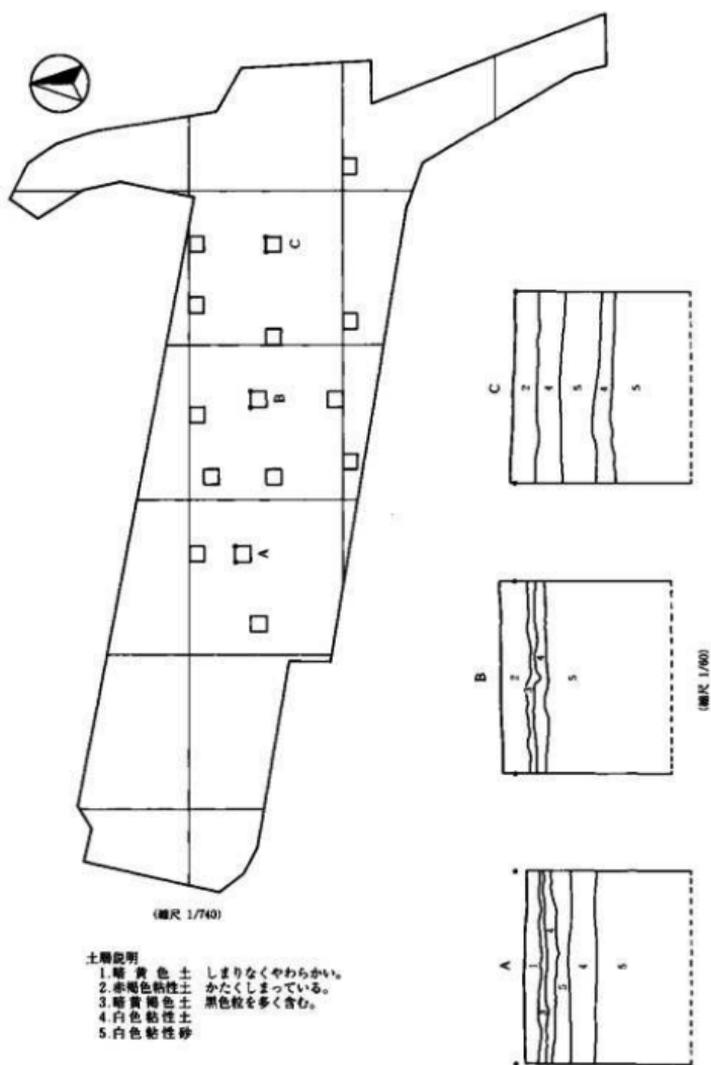
なお、調査中に土層堆積の把握をする際、土壌サンプルを採集した。土層がいつ堆積したかを知り、この地形がどのように形成されたかを探りたいと考えたためであったが、周辺の地域に上層から下層の深いところまで連続して採集して比較し得る、良好なサンプルを見つけれなかったことや、調査中に地表面が乾燥しひび割れて多量の雨水が流入したり、もともと地下水の豊富なことなどから、分析に必要な含有鉱物が解け出していることが考えられ、特に有効でないとの判断から土壌分析については行わなかった。

### 参考文献等

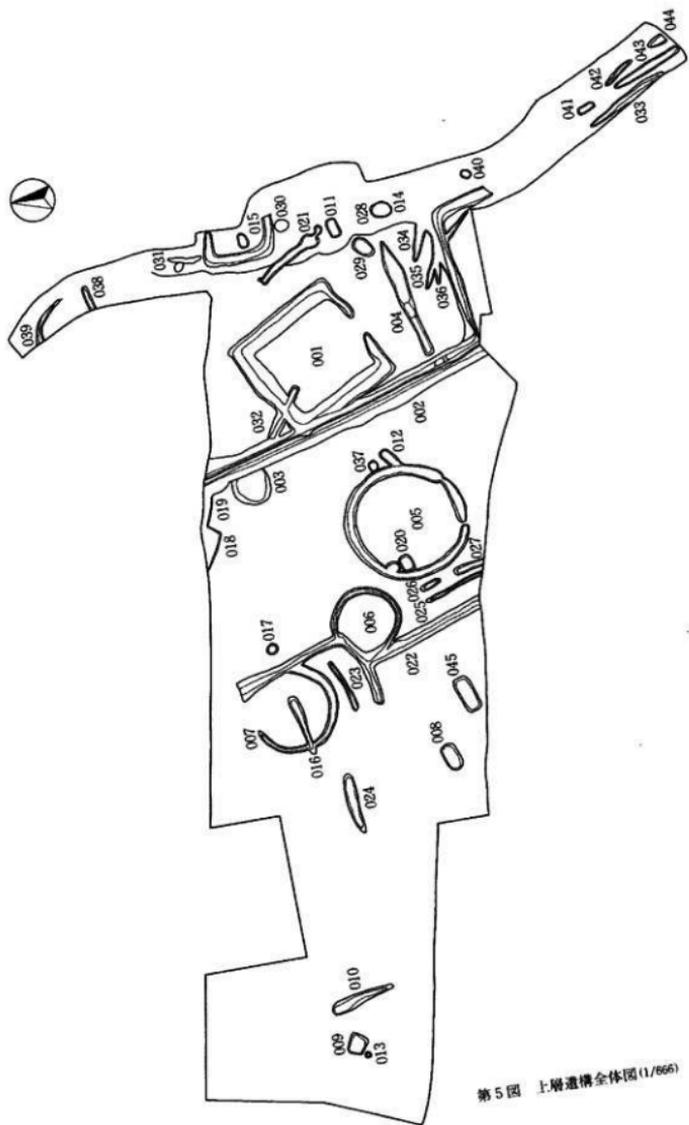
松井健他『丘陵地の自然環境—その特性と保全—』古今書院 1991

徳橋秀一他『姉崎地域の地質』地質調査所 1984

『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報』千葉県教育庁生涯学習部文化課 1989



第4図 先土器時代確認グリッド・セクション図



第5图 上层结构全体图(1/866)

### Ⅲ 縄文時代

#### 1 遺構

##### 003号跡（住居跡）

調査区中央北側の最も平坦な部分に位置する。東側を001号跡によって切られている。プランは東西にやや長いびつな円形を示し、最大径は3.8mを測る。深さは17cmから20cmを測る。床面はもともと硬い土層の上に中央部は更に踏み固められて、硬く盛り上がっている。周辺が深く、中央は浅くなっている。その中央には床面に接して焼土が堆積し、これを取り除くと床面が掘り下げられた炉が検出された。壁は確認するかぎりでは、床から35度から40度程の緩やかな傾斜を持って立ち上がっている。覆土は1. 暗黄褐色土粒を少し含む暗黄褐色粘性土。2. 白色粘性土粒を少し含む暗黄褐色粘性土であった。

出土遺物は覆土中、とくに床面および床面直上からまとまった縄文土器片を出土した。石器、黒曜石の剝片、礫も出土した。

#### 包含層

確認調査で表土内に黒曜石の剝片や礫を多く包含することがわかったので、表土除去を極力人力で行い、遺物の採集に努めた。包含層の厚さが約10cmで、篠竹の根がはびこり元来の位置をとどめている可能性は少ないと思われたので、2m×2mの小グリッドごとに遺物の取り上げを行った。

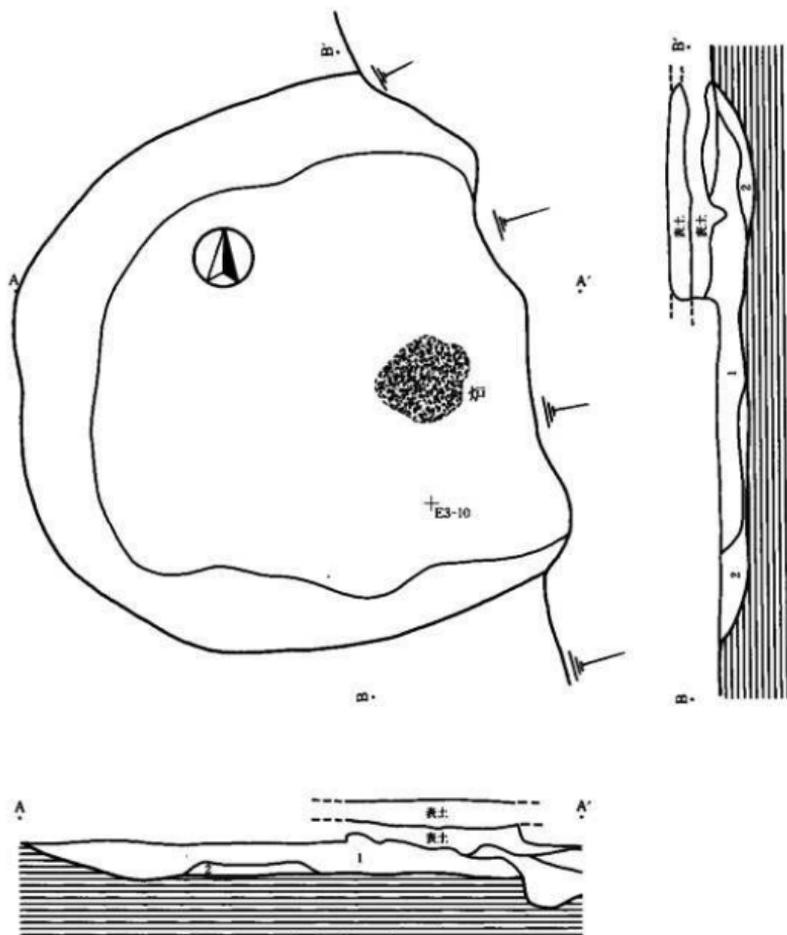
#### 2 遺物

##### 土器

縄文時代の遺構は003号跡だけなので遺構内と遺構外に分類されるが、遺構外のものもここで一括して報告する。

##### 003号跡出土の土器

1は口縁に8条の沈線がめぐっている。内外面は赤灰色、胎土は黒灰色である。2は半截竹管によって、菱形を区画した交点に、粘土粒を貼り付けてある。外面は灰茶褐色、内面は赤褐色、胎土は暗灰色である。3はコンパス文が施され、内外面は赤灰色、胎土は暗茶褐色。4は平行沈線の中をはしご状に区切り、その下に斜めの沈線と刺突文を施している。外面は灰褐色、内面は赤褐色、胎土は黒色である。5は羽状縄文とコンパス文が施されている。外面は黄褐色、内面は灰色、胎土は灰白色である。6は口縁を溝状のもので斜行させてある。外面は黄灰色、

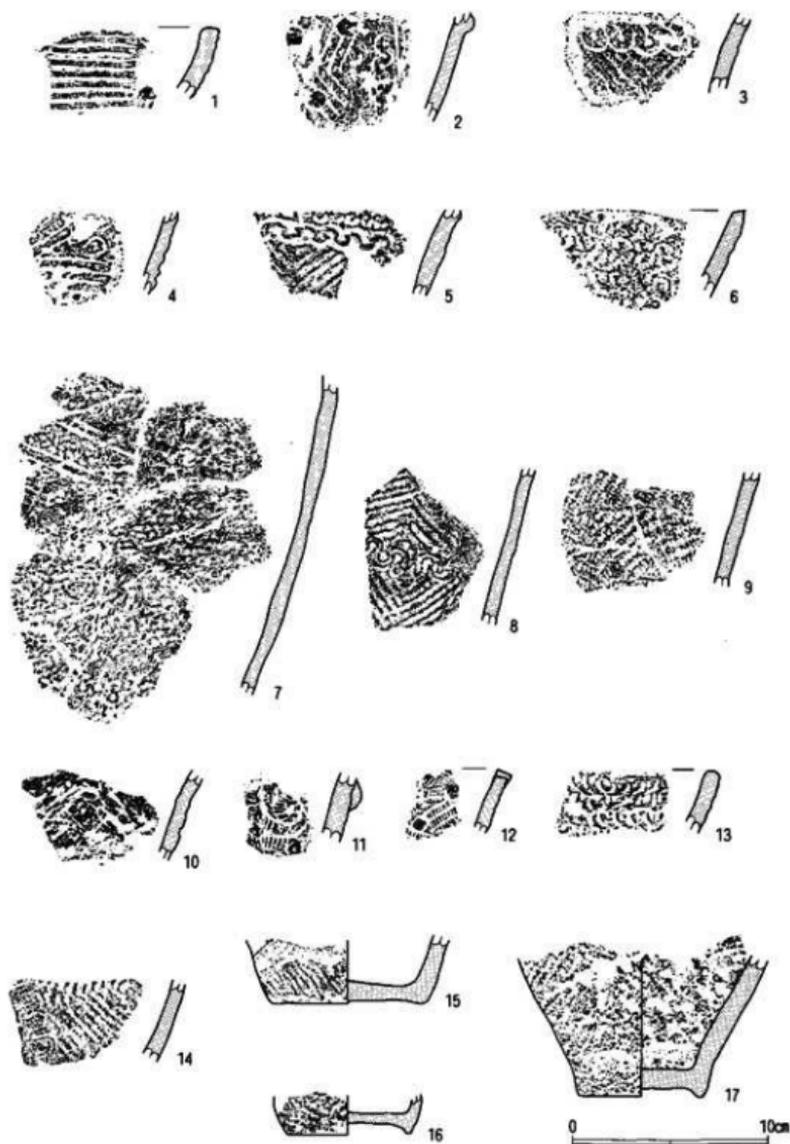


第 6 図 003号跡平面図・セクション図(1/40)

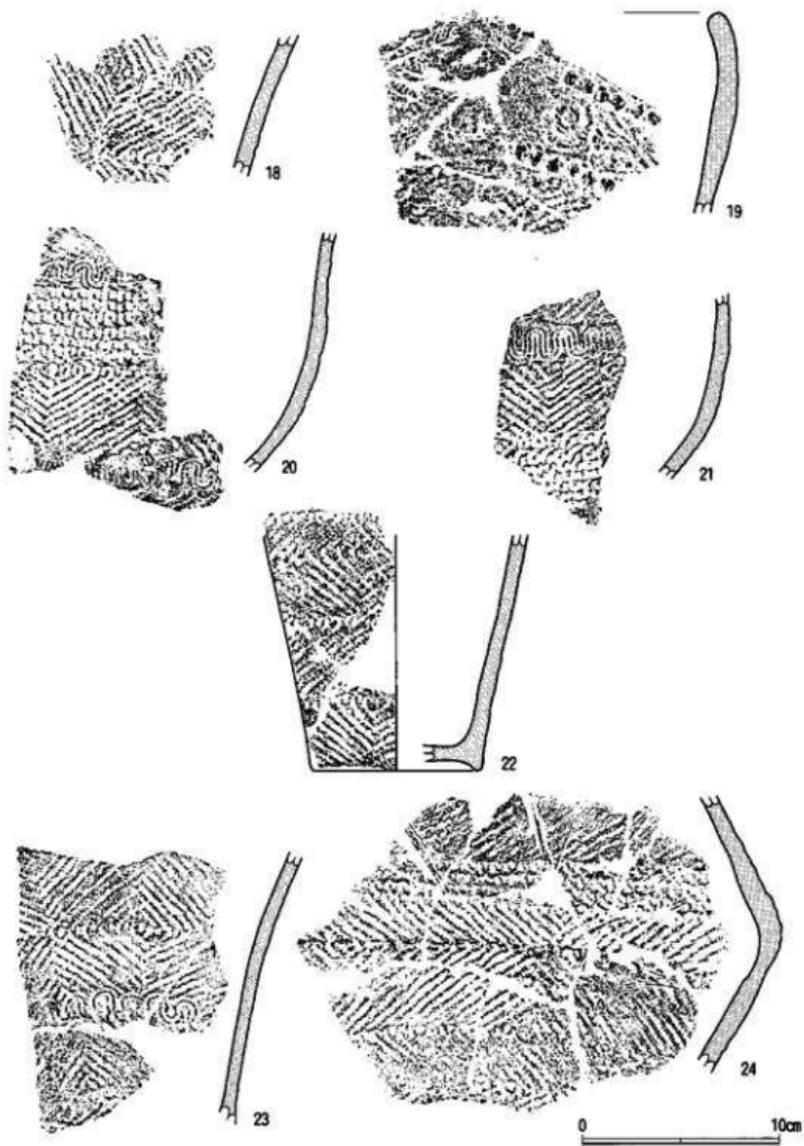
内面は黄褐色、胎土は黒灰色である。7は特に剝離、摩耗が激しいが縄文が残り、平行な2本の沈線が施されている。内外面は赤褐色、胎土は黒灰色である。8は羽状縄文の中にコンパス文を施してある。外面は赤灰色、内面は暗茶褐色、胎土は黒灰色である。9は羽状縄文のみで外面は赤灰色、内面は暗茶褐色、胎土は暗灰色である。10も羽状縄文のみで、外面は赤褐色、内面と胎土は黒灰色である。11は半截竹管による沈線の中をへら状の工具で刻んだはしご状文と粘土紐による貼り付き文によってによってわらび手状文を施している。外面は灰茶褐色、内面は赤灰色、胎土は灰茶褐色である。12ははしご状文によって鋸歯状に施文した交点に粘土粒を貼り付けてある。内外面は灰赤色、胎土は黒灰色である。13は平緑の口縁に羽状縄文が施されてある。内外面は赤褐色、胎土は黒色である。14はコンパス文が施されている。外面は暗灰褐色、内面は暗茶褐色、胎土は暗灰褐色である。15は深鉢の底部で上げ底になっている。内外面は赤灰色、胎土は灰褐色である。16も深鉢の底部で上げ底になっている。内外面、胎土とも黒褐色である。17も深鉢の上げ底で、外面と胎土は赤褐色、内面は灰褐色である。18は羽状縄文のみで外面は赤灰色、内面は黒褐色、胎土は黄褐色である。19は波状口縁に平行する半截竹管文の内側をへら状の工具で斜めに刻む模様に乗せてひし形に区画した後、交点などに粘土粒を貼り付けてある。内外面は黄灰色、胎土は黒灰色である。20、21は横位の組み紐による文様とコンパス文が施されている。内外面は赤灰色、胎土は黒灰色である。22は深鉢の底部で羽状縄文が施されている。上げ底である。外面は赤灰色、内面と胎土は黒灰色である。23は羽状縄文にコンパス文が施されている。外面は赤灰色、内面は茶褐色、胎土は黒灰色である。24は深鉢の胴部に羽状縄文が施されている。内外面とも赤褐色、胎土は黒灰色である。1から24まですべて胎土に繊維を含む。

#### 遺構外の土器

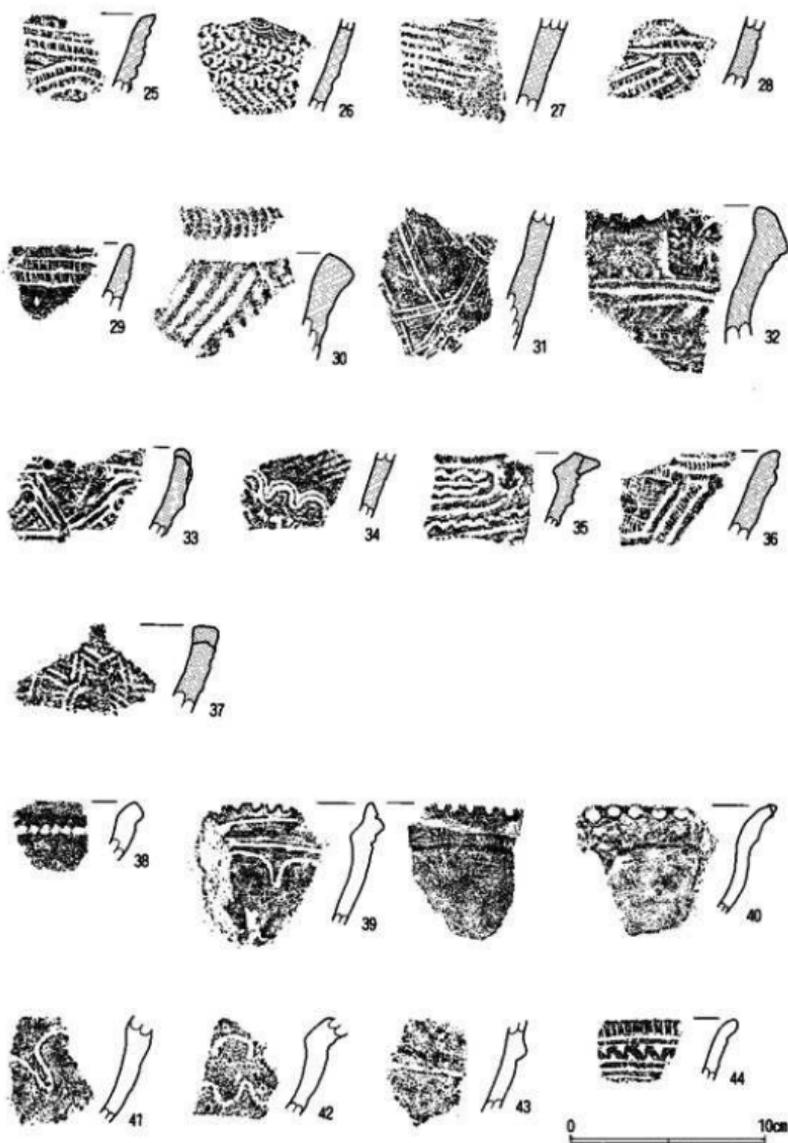
25は波状口縁に半截竹管によって平行に沈線を施し、内部をへら状のもので刻んでいる。その下部を同様のはしご状文でわらび手状に描いている。内外面は赤灰色、胎土は黒灰色である。26はコンパス文と組み紐による縄文が施されている。外面は赤褐色、内面は黄灰色、胎土は暗灰色である。27は刺突文がある。外面は暗灰褐色、内面は暗黄褐色、胎土は灰茶褐色である。28ははしご状文で鋸歯状に文様が施されている。内外面ともに灰茶褐色、胎土は灰褐色である。29は平緑の口縁に平行して半截竹管とへら状工具によって、はしご状の文様を施してある。内外面ともに暗灰褐色、胎土は灰褐色である。30は平緑の口縁で、内外面、胎土ともに黄褐色である。31は半截竹管による斜行交差が描かれ内外面とも赤灰色、胎土は黒灰色である。32は平緑の口縁に沿って沈線を施しその下に斜めの刻み目とはしご状の刻みを施してある。内外面、胎土とも黄赤褐色である。33は波状口縁を半截竹管によって鋸歯状に区画し交点などに粘土粒を貼り付けている。内外面とも赤灰色、胎土は黒灰色である。34はコンパス文を施してある。



第7图 縄文時代土器片拓影图(1)



第8図 縄文時代土器片拓影図(2)



第9図 縄文時代土器片拓影図(3)

内外面とも黄灰色で、胎土は赤灰色である。35は深鉢の口縁で組み紐による縄文が施されている。外面は焦茶色、内面は赤茶色、胎土は焦茶色である。36は平縁の口縁で鋸歯状にはしご状文を施し交点に粘土粒を貼り付けている。内外面、胎土とも明るい赤褐色である。37は波状口縁に鋸歯状にはしご状文を施している。内外面、胎土とも黄灰色である。25から37までは胎土に繊維が含まれている。

38から43までは黄灰色の胎土に繊維を含まない土器片、44は胎土に繊維を含まない灰茶色の土器片である。

## 石器

石器は、遺構内から6点、遺構外から44点見つかった。一括して報告する。

### 石錐（1）

1点出土した。つまみ部を作り出しており、扁平な断面を示す。調整は両面加工。先端部が欠損している。石材は安山岩である。

### 石鏃（2～21）

20点出土した。そのうち、有茎のものが2点、無茎のものが18点である。無茎のものの基部の形態はすべて凹基型、調整技術から見ると片面加工のものが1点（6）で、後はすべて両面加工である。石材は黒曜石12点、チャート4点、メノウ、流紋岩、安山岩、珪質頁岩がそれぞれ1点ずつであった。なお8は003号跡から出土した。17、18は失敗作、21は未製品と考えられる。

### くさび形石器（22～36）

15点出土した。調整は長軸あるいは短軸の両極に加わった打撃によるものである。石材は黒曜石4点（22～26）、頁岩2点（23・33）、チャート2点（30・31）、安山岩2点（27・32）、凝灰岩2点（34・35）、砂岩1点（28）、凝灰質砂岩1点（29）、粘板岩1点（36）であった。黒曜石以外のものは概して大きく、また、黒曜石のものは剥片などを使用しているのに対し、他は円礫片を使用する傾向があった。33、34は003号跡から出土した。

### 打製石斧（37）

1点出土した。凝灰岩の礫を利用し、粗雑な調整が全周している。一方に礫面を残し、もう一方に研磨および、使用のためにできたと思われる擦過痕が認められる。

#### 礫器 (38~45)

8点出土した。いずれも円礫の一端に粗雑な調整を施し、片刃を作っている。石材は安山岩3点、凝灰質砂岩2点、砂岩、花崗岩、粘板岩が各1点であった。42、43、45は003号跡から出土した。

#### 敲石 (46~48)

3点出土した。砂岩2点、安山岩1点のいずれも円礫を使用してなにかの細長い形状のものを幾度も敲打したものと思われ欠損している。46、47については欠損が大きく不明だが、48は両面を敲打している。また、46、48は円礫であった間に被熱している。

#### 砥石 (49・50)

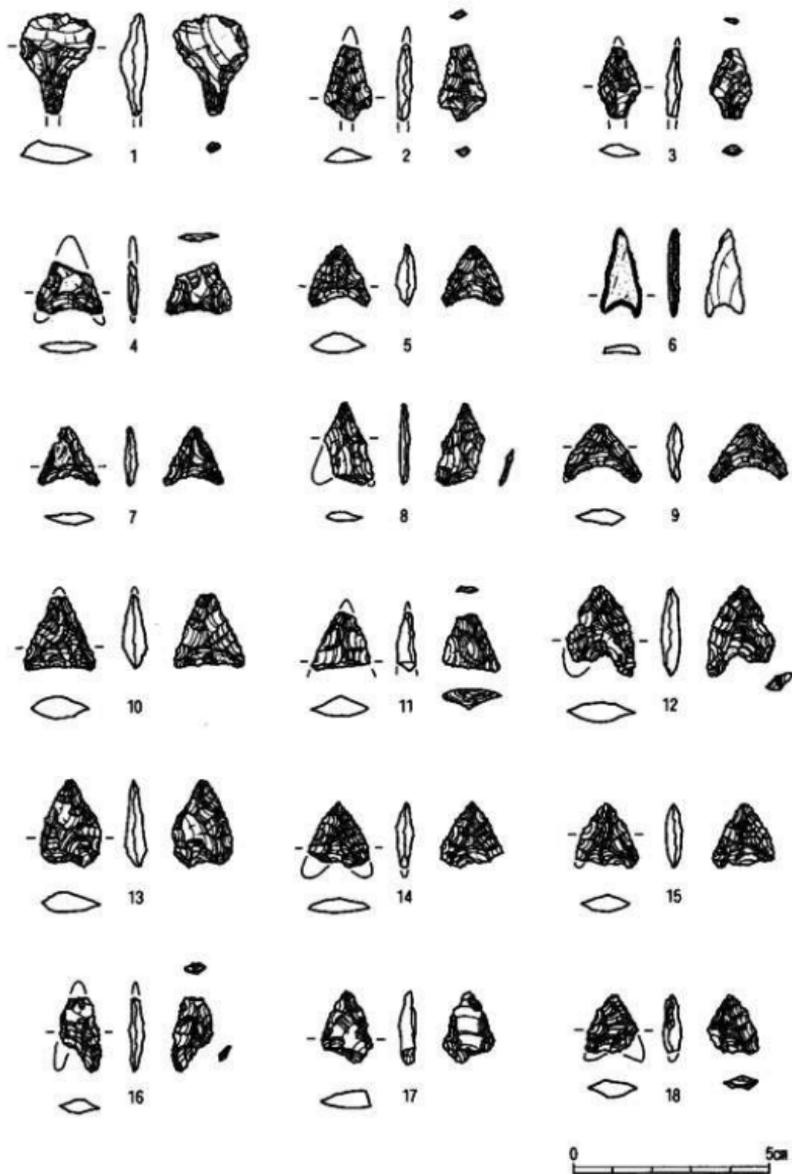
2点出土した。49は凝灰質砂岩の敲石の破片を転用し、両面を使用してなにかを研いでいる。50は砂岩で使用のために三角錐形になっている。底部は欠損している。

#### 剥片

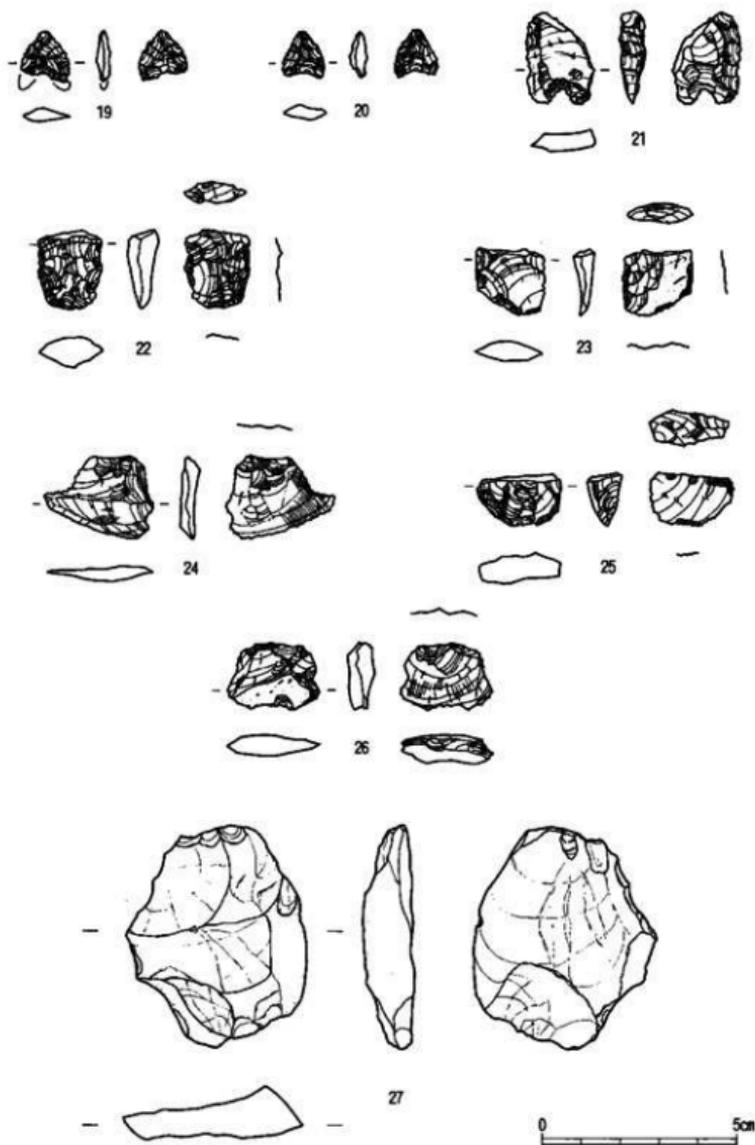
計1,816点採集した。総重量は548.5gであった。石材は圧倒的に黒曜石が多く、他は、チャート、安山岩、メノウが少量含まれた。使用痕のある剥片や、2次加工痕のある剥片もごく少量含まれた。

#### 礫

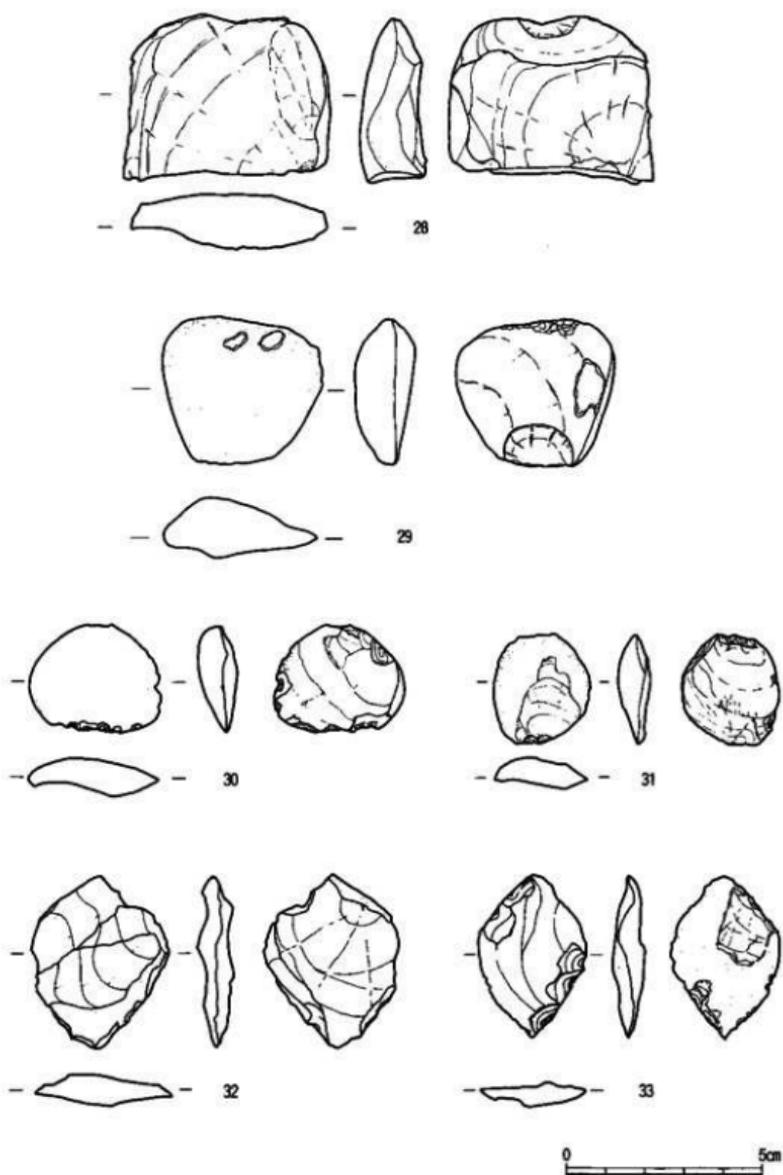
計2,256点採集した。総重量は68,292kgであった。その内訳は円礫278点、計11,818kg。被熱したと思われる円礫124点、計10,769kg、被熱して破砕したと思われる礫1,063点、計28,191kg、被熱していないが破砕している礫787点、計17,001kg、その他不明のもの4点、計0,512kgを採集した。重量で見ると被熱したものが多く、その使用方法が検討されようが、群を構成して出土したものは皆無であった。被熱したものの石材は砂岩や安山岩の堆積岩と、花崗岩のような結晶をもつものが多く、大きさは直径6~10cmほどのこぶし大のものが選ばれて使用されている。一方熱の加わっていないものの多くは珪質で前者よりも小型のものが多かった。



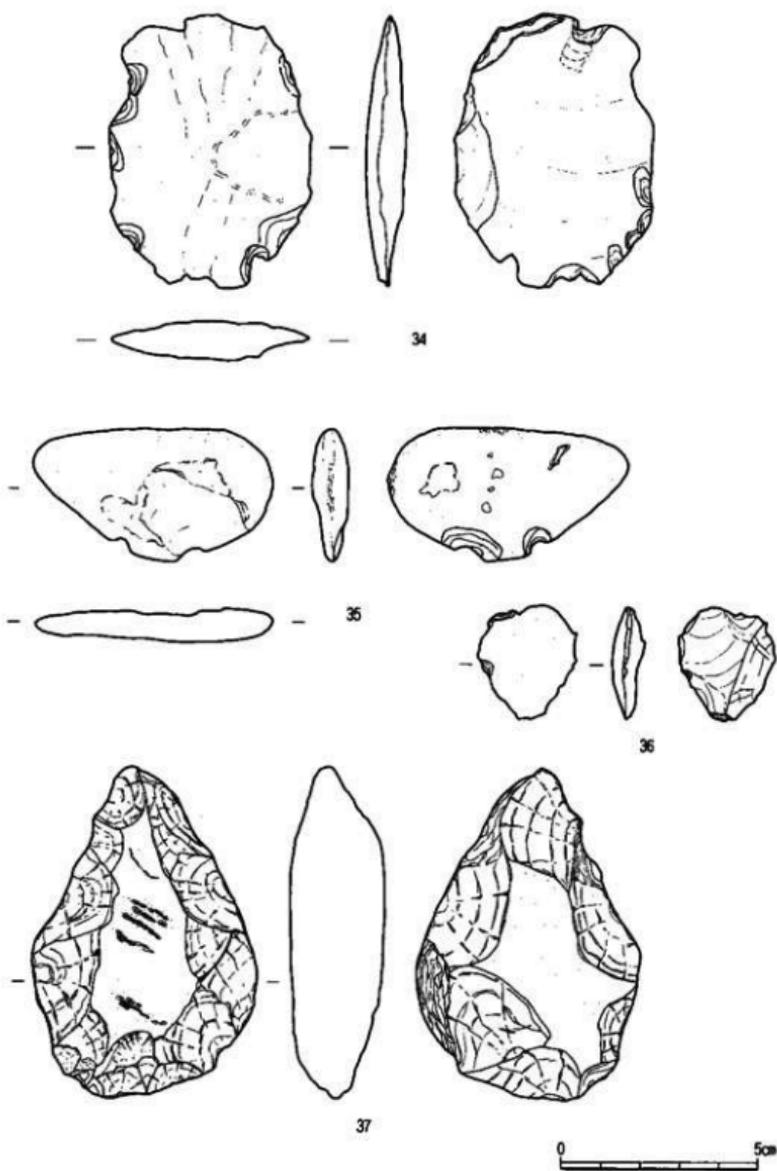
第10图 石器实测图(1)(2/3)



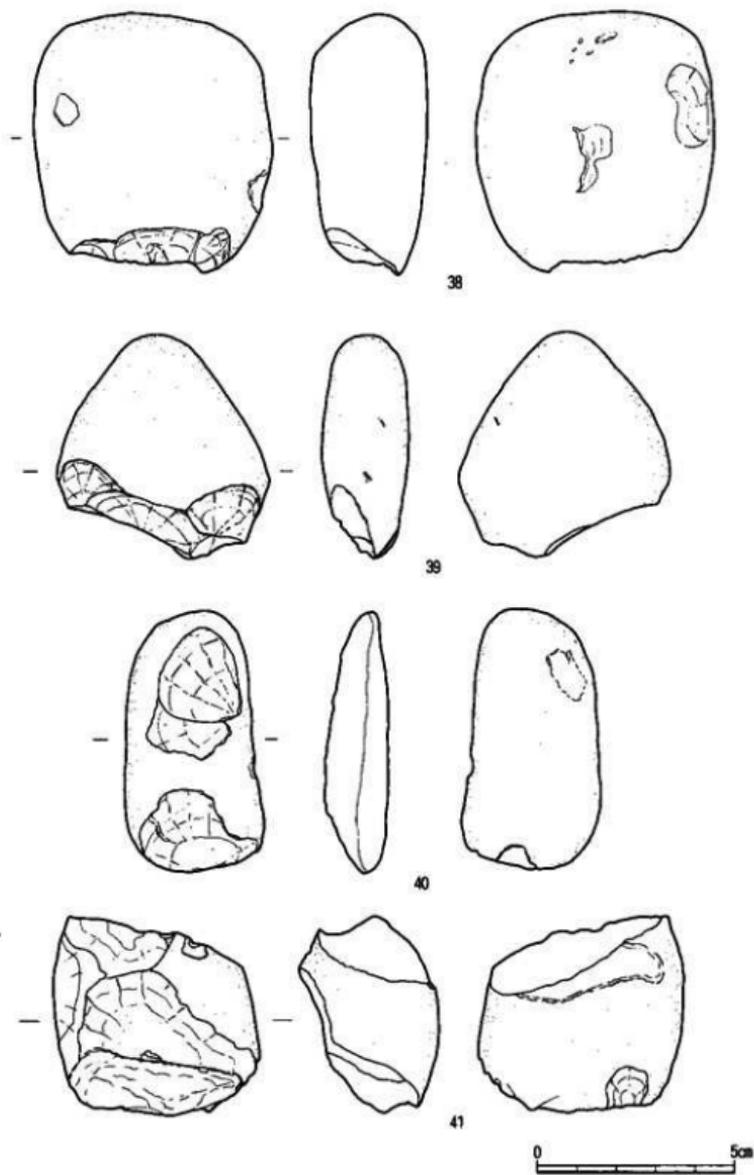
第11图 石器实测图(2)(2/3)



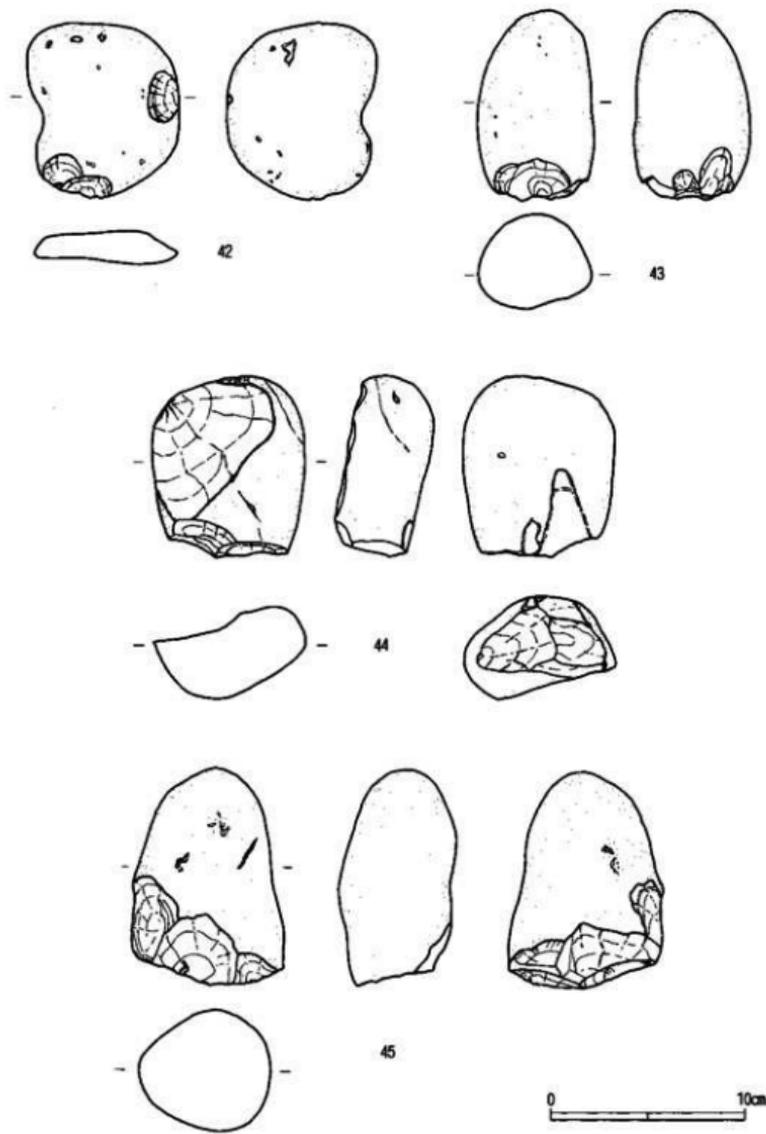
第12图 石器实测图(3)(2/3)



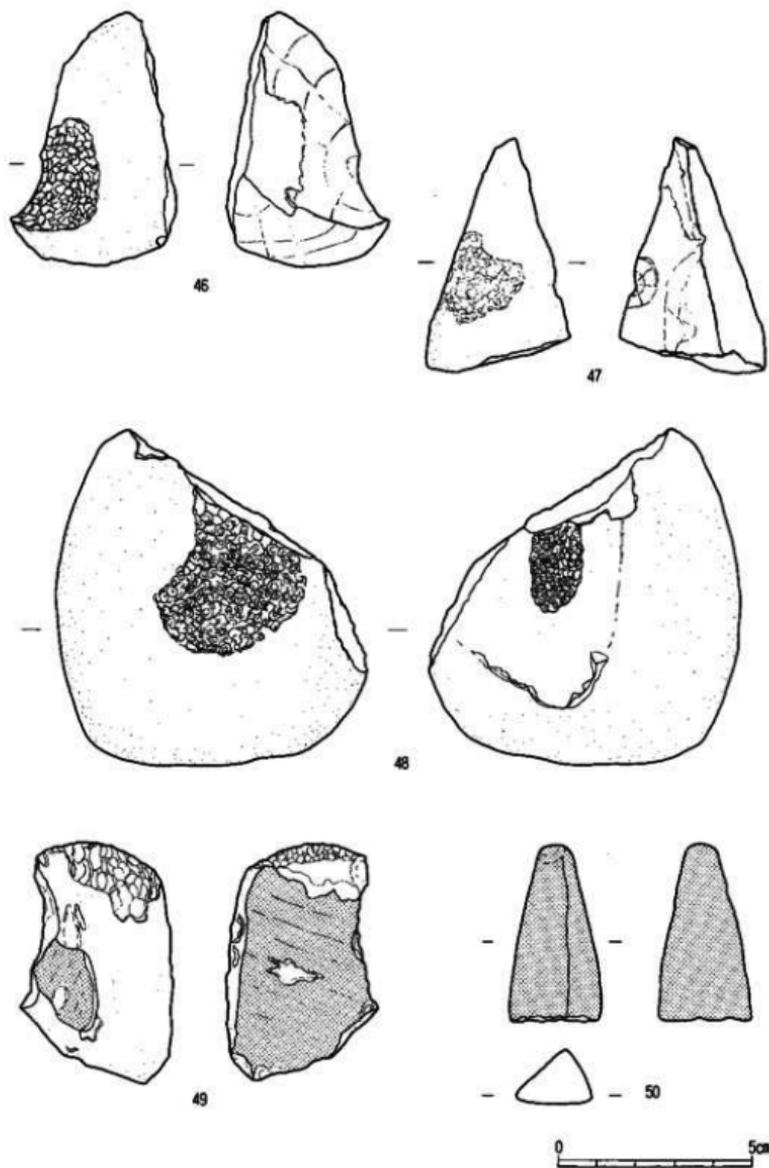
第13图 石器尖测图(4)(2/3)



第14图 石器实测图(5)(2/3)



第15图 石器实测图(6)(1/3)



第16图 石器实测图(7)(2/3)

第1表 石器計測表(1)

## 石 鏃

標図 番号	遺物番号	大 き さ (mm)			重 量 (g)	調 整 技 術	石 材	そ の 他
		長 さ	幅	厚 さ				
1	E3-66-02	26.4	18.6	6.5	2.4	両面加工	安山岩	先端欠損

## 石 鏃

標図 番号	遺物番号	大 き さ (mm)			重 量 (g)	調 整 技 術	基部の形状	石 材	そ の 他
		長 さ	幅	厚 さ					
2	005-159	19.9	12.0	4.3	1.0	両面加工	有 茎	チャート	先端・基部欠損
3	表探(154)	18.5	10.3	3.6	0.6	◇	◇	黒曜石	◇
4	表 探	13.0	16.6	2.5	0.6	◇	凹 茎	チャート	先端脚先欠損
5	表探(154)	15.3	15.6	4.9	0.8	◇	◇	◇	完形
6	D3-49-02	22.3	10.1	2.5	0.6	片面加工	◇	◇	◇
7	C3-66-03	15.6	14.9	3.1	0.4	両面加工	◇	珪質頁岩	◇
8	003-009	20.8	12.8	2.6	0.4	◇	◇	流紋岩	脚欠損
9	022一括	14.6	19.4	4.1	0.6	◇	◇	安山岩	脚先端
10	001一括	18.5	17.6	6.1	1.6	◇	◇	メノウ	先端欠損
11	E3-61-1	14.5	14.8	5.1	0.8	◇	◇	黒曜石	先端・基部
12	E3-71-1	22.7	17.6	4.9	1.4	◇	◇	◇	脚
13	005-152	21.8	15.2	5.3	1.6	◇	◇	◇	完形
14	001-110	16.6	16.2	4.4	0.8	◇	◇	◇	両脚
15	03-11	16.0	15.8	4.3	1.0	◇	◇	◇	先端・片脚
16	表探(154)	18.7	10.2	3.8	0.6	◇	◇	◇	◇
17	E3-60-01	18.1	13.2	4.4	0.8	◇	◇	◇	基部欠損後調整有り
18	表探(154)	14.5	12.9	4.7	0.8	◇	◇	◇	基部欠損
19	C3-07-01	13.2	12.2	3.6	0.4	◇	◇	◇	両脚
20	E3-34-02	12.3	10.9	4.4	0.6	◇	◇	◇	完形
21	009一括	24.2	17.2	6.5	2.8	◇	◇	◇	未製品

第2表 石器計測表(2)

## くさび形石器

押図 番号	遺物番号	大 き さ (mm)			重量 (g)	調整技術	石 材	そ の 他
		長さ	幅	厚さ				
22	022一括	19.8	15.8	8.3	2.4	長軸一端	黒曜石	欠損後も使用
23	E3-01	16.4	18.0	5.4	1.6	*	頁岩	
24	D3-11-01	21.3	27.6	5.1	2.2	短軸	黒曜石	下部欠損
25	E3-00-05	13.0	21.1	9.2	2.2	*	*	折断後も使用
26	022一括	16.7	23.2	7.2	2.8	*	*	下端折断
27	C5-07	56.0	41.0	13.0	38.4	長軸	安山岩	円礫素材
28	022一括	41.0	52.0	17.0	51.8	短軸	砂岩	*
29	033一括	42.0	41.0	16.0	26.4	*	凝灰質砂岩	*
30	E3-56-02	2.7	3.4	1.0	10.0	*	チャート	*
31	F3-00-01	2.8	2.5	0.9	6.4	長軸	*	*
32	C3-38-01	44.0	35.0	8.0	7.2	*	頁岩	*
33	003-304	42.0	28.0	8.0	11.2	*	*	*
34	003-061	71.0	51.0	10.0	41.2	*	凝灰岩	*
35	E3-21-01	34.0	60.0	9.0	25.0	短軸	*	*
36	002一括	28.0	25.0	8.0	4.8	長軸	粘板岩	* 欠損

## 打製石斧

押図 番号	遺物番号	大 き さ (mm)			重量 (g)	調整技術	石 材	そ の 他
		長さ	幅	厚さ				
37	022一括	84.0	57.0	24.0	137.6	両面	凝灰岩	使用痕有り

## 礫 器

押図 番号	遺物番号	大 き さ (mm)			重量 (g)	刃部の形態	石 材	そ の 他
		長さ	幅	厚さ				
38	005-152	66.0	61.0	30.0	430.2	片刃	安山岩	円礫
39	E3-52-02	55.0	54.0	22.0	186.6	*	*	*
40	F3-61-01	67.0	35.0	16.0	49.4	*	凝灰質砂岩	*
41	009一括	49.0	51.0	33.0	106.1	*	砂岩	* 欠損
42	003-005	93.0	76.0	23.0	80.6	*	安山岩	円礫
43	003-007	99.0	60.0	50.0	231.0	*	凝灰質砂岩	*
44	B3-06	93.0	79.0	43.0	536.2	*	花崗岩	* 欠損
45	003-275	112.0	79.0	59.0	719.7	*	粘板岩	円礫

### 3 縄文時代のまとめ

縄文時代の遺構は003号跡のみであった。関山式のまとまった土器片（1～37等）が出土し縄文時代前期に比定された。

一方、遺構外には確認調査時から該期の遺物が表土内に多く見つかったので表土除去の際には十分注意し、極力2m×2mのグリッドで遺物の取り上げを行った。遺物の分布の傾向から、失われてしまったかもしれない該期の遺構や、石器製作の中心地を探ることができるかもしれないと考えたからである。整理作業でも特に多く採集した黒曜石の剥片と礫については分布図の作成を試みたが、現地と考えていたほどには集中せず、剥片については003号跡の周辺のエ3区に、また、礫についてはD3区を中心に遺跡全体に散漫に散っていたことがわかったにとどまった。このことは削平が進んでいたため、多くのものが失われていると考えられることや、残っていても新しい遺構の覆土に含まれたものはまったく元の位置を離れグリッド取り上げからはずれるため、例えば、剥片は、グリッド取り上げのもの975点、遺構内一括のもの841点となり元位置に近いと思われるものは50%にしか満たず、分布を探るにはいたらなかった。とはいうものの、この調査によって、表土内の遺物の多くを採集することができた。土器片については住居内のものと同じ関山式のものほか、わずかに阿玉台式と思われるもの（38～43等）や、前期末から中期初頭と思われるもの（44等）が見つかった。

石器についても石鏃や剥片を中心に遺物を採集することができ、礫についても焼けた礫を中心に採集することができた。これらも003号跡に関連する該期のものとして、とらえてよいと考えられる。

関山式の遺跡は周辺にはまだ少ない。この時期は海進が進みこの周辺に人が住んだ時代のなかでは眼下に海が迫り非常に異なった景観であったと思われる。人の暮し向きを検討するには十分な注意が必要である。今後周辺の調査が進むことによって該期の暮らしが明らかになることを期待する。

## IV 古墳時代

### 1 遺構

#### 005号跡（円墳）

D3区に位置する。周溝のみの確認で、盛土や主体部は見つからなかった。周溝は内径10.4mを測り、ほぼ円形であるが、南側はごくわずかに切れている。周溝の幅は最大1.1m。断面は北側の深いところは逆台型、浅いところはU字型である。遺物は周溝内から土師器坏片と弥生時代後期の土器片が1点出土した。

#### 006号跡（円墳）

D3区の005号跡の北西側に位置する。周溝のみの検出で盛土や主体部はみつからなかった。北側と西側は022号跡によって切られている。

周溝は内径6.2mを測り、ほぼ円形である。幅は最も広いところで0.7m。断面はU字型を呈している。出土遺物は縄文時代のもの以外はなかった。

#### 007号跡（円墳）

C3区に位置する。周溝のみの検出で、盛土や主体部はみつからなかった。かつて宅地造成工事が入り、そのため表土がほとんどなく、かろうじて検出されたため遺存状況はきわめて悪かった。北側は失われている。東側は022号跡に、西側の一部は016号跡に切られている。周溝は内径で7.8mを測る円形であるが、前述のとおり全周しない。

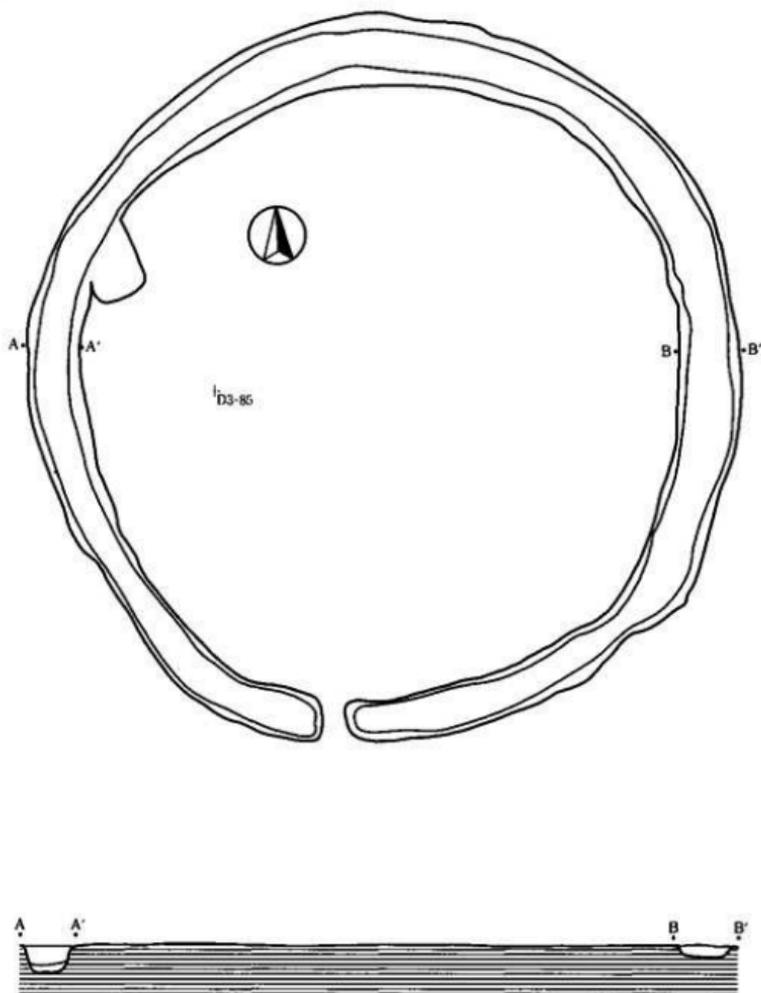
遺物は古いものしか見当らなかった。

#### 012号跡（土坑墓）

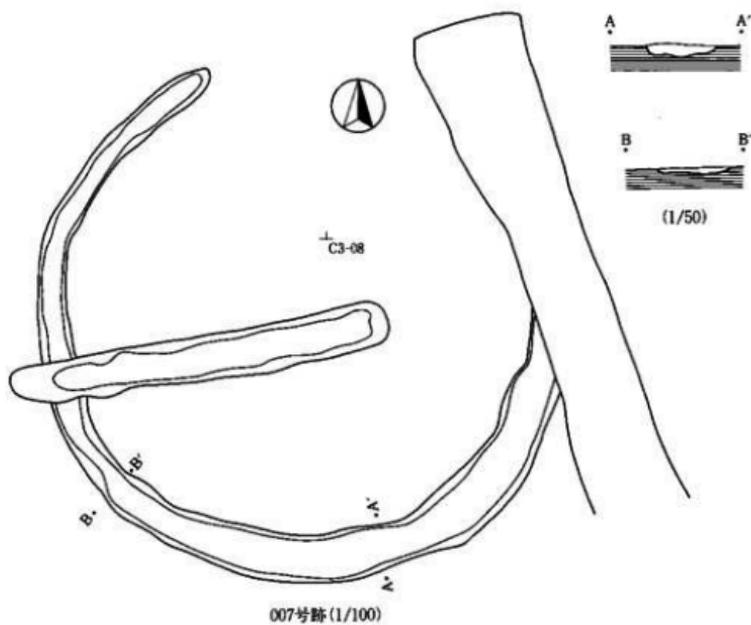
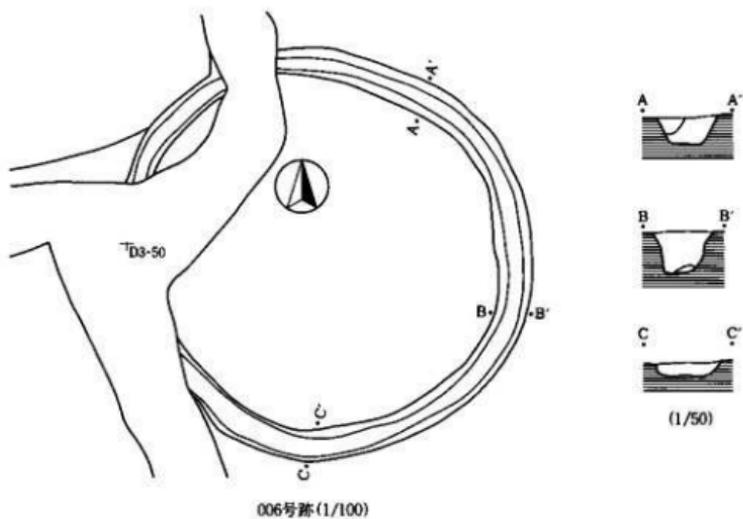
E3区に位置し、005号跡によって切られている。長軸2.5m以上、短軸1.0mの長方形を呈している。上方を削られ、攪乱も入り遺存状況が悪かったが、床面に遺物が出土した。（第20図1、3）。

#### 018号跡（住居跡）

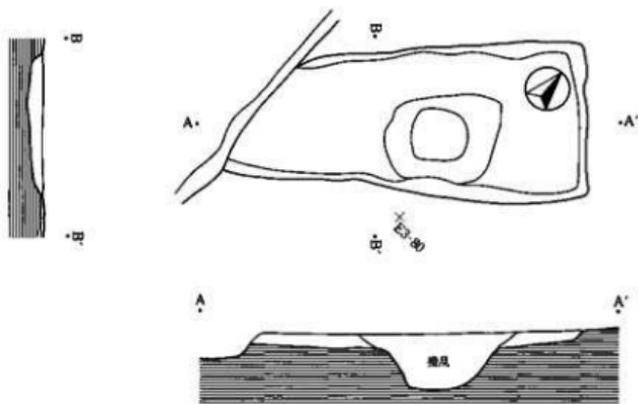
D2区に調査範囲にかかって検出した。019号跡と切り合っているが、共に非常に遺存状況が悪かった。1辺4.2m。壁の高さは16cmほどであった。018号跡の約3分の2と019号跡の5分の4ほどは調査区外に位置するが、調査区に接した農道が床面より下がっているため、全掘は無理であった。主柱穴を1基検出したが、壁溝は検出しなかった。床面も硬化面などは見つからなかった。カマドも調査区内には見つからなかった。遺物は床面から土師器甕、



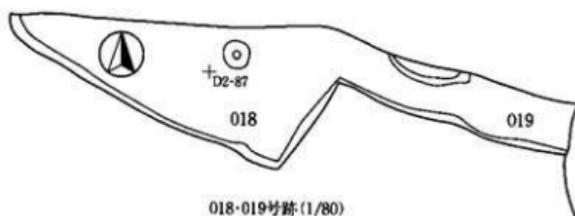
第17図 005号跡平面図・セクション図(1/100)



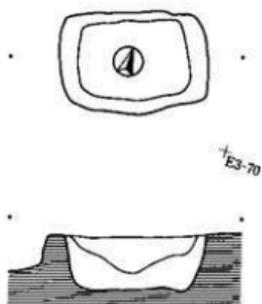
第18図 006,007号跡平面図・セクション図



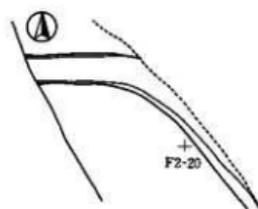
012号跡



018-019号跡(1/80)



037号跡(1/40)



039号跡(1/100)

第19図 012,018,019,037,039号跡平面図・セクション図

土師器片等が出土したが（第5図）、遺存状況が悪く、復元不能なものが多い。

### 019号跡（住居跡）

前述の018号跡と切り合っている。床面のレベルは同じであった。遺物はほとんど見当らなかった。新旧関係は判断しにくい、018号跡は遺物は比較的まんべんなく覆土から出土したが、ほとんど遺物のなかった019号跡を侵しているので018号跡が019号跡を切っていると考えることが可能である。東西が他の遺構に切られており規模は不明である。

### 037号跡（土坑墓）

005号跡に近接して検出した。長軸1.0m、短軸0.8mの長方形で、規模が小さい割りに掘り込みが深く、遺存状態が良好であった。位置関係から005号跡との関連がうかがえる。

### 039号跡（溝状遺構）

F2区に位置する。続きが調査区外になっており、検出したほとんどが農道によって壊されているため、性格が不明である。当初は円墳の一部として考えたが、確定できなかった。正しいところは今後の調査を待たねばならない。

遺物は見つからなかった。

## 2 遺物（第20図1～7）

該期の遺物は、非常に少なく、破片ばかりであった。また、胎土や焼成によるものか風化が激しく、実測できたものは少ない。遺構内外のものを一括して報告する。

1は須恵器壺の蓋で天井部には雑な回転ヘラケズリが入っている。胎土には白色砂礫粒が含まれ、色調は灰白色を呈する。2は須恵器壺蓋の坏身で、外に向かってのびるつば状の受け部のみの破片資料である。色調は灰青色で胎土は細密で白色細砂粒が散っている。3は須恵器瓶の口縁から頸部片で、口縁部内面には厚く自然軸が付く。4は外反する土師器甕の口辺部で口縁端部はややつまみあげたように仕上げている。5は012号跡から出土し直立気味の短い口辺部をもち、口径< 口径になる土師器小型甕の破片である。6、7は土師器甕の底部で被熱して赤色化している。6は018号跡から出土している。1～7の土師器はいずれも色調は明るい褐色を基調としており、胎土は細密で白色砂礫粒と赤色酸化物粒を含んでいる。

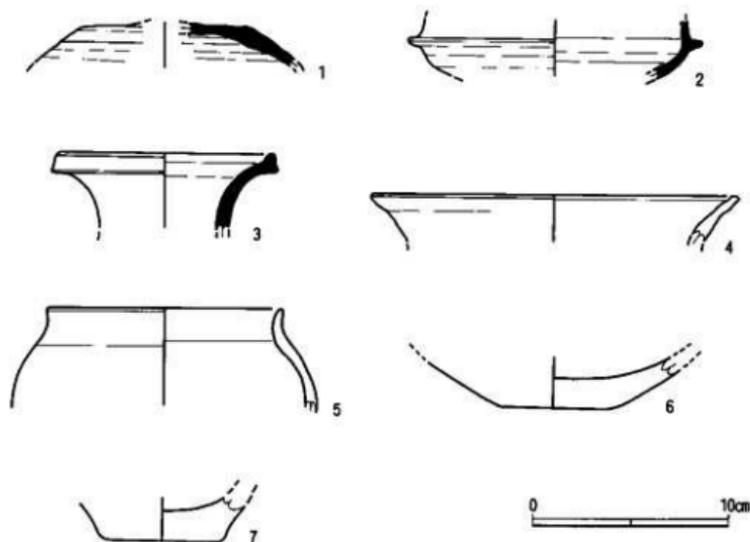
## 3 古墳時代のまとめ

当調査区で検出された古墳時代の中心となるのは小規模で埋葬施設をもたない円墳で、盛土は削平によって失われていた。そのほかに住居跡、土坑墓などが見つかった。遺物を出土した

遺構が少なく、量も少ないが、おおよそ6世紀から7世紀初頭と考えられる。005号跡、018号跡、019号跡がそれにあたると思われる。012号跡はそれより古い。当調査区では3基、可能性のあるものを含めると4基の円墳を調査し、前年の君津郡市文化財センターの調査では調査区北側と南側で6基の円墳を確認している。本調査が進めばさらにその数が増えるものと思われ、新発見の古墳群といえる。全容が明らかでないので、断言は避けなければならないが、それぞれの調査を考え合わせると6世紀中頃から集中して古墳が作られたものと思われる。周辺のやせ尾根上には四留作古墳群をはじめ一大古墳群が存在するが、それらの時期よりもやや新しく、位置も異なることから墓域の変遷がうかがわれる。一方これらの墓を作り守った人々の居住の痕跡は、当調査区のようなやせ尾根の周辺では貴重とも言える平場においてもわずか2軒、周辺の確認調査を合わせても5軒にとどまる。周辺低地で生産にかかわった人達がはやばやとより低いところに集落を移動させたことが見てとれる。この地域一帯の遺跡の調査が進み、墓域のみならず、先進性をもってより低いところに降りた当時の人達の生活圏の復元が可能になることが期待される。

#### 参考文献等

「君津郡市文化財センター年報9」財団法人君津郡市文化財センター 1990



第20図 古墳時代遺物実測図(1/3)

## V 歴史時代

### 1 遺構

#### 001号跡（方形周溝状遺構）

E3区の東斜面に至る平場の肩に位置している。軸を南北からやや西に傾けている。西側を002号跡によって切られている。確認調査時から注意したが、盛土は遺存しない。周溝の内側のやや南寄りに白色粘性土のブロックが散乱していたが、調査の結果、木根により下層から掘り出されたもので主体部ではないことがわかった。主体部、あるいはそれに類する施設は検出しなかった。周溝は内径で8.5mを測りほぼ方形であるが、南のなかほどがとぎれて橋状になっている。周溝幅は、最大2.2mで、断面は内側に浅い溝、外側に深い溝と、2段から3段に掘られている。この断面は浅い内側の溝が埋まった（あるいは埋められた）後に、外側の深い溝が掘られていることを示すものになっている。内側の浅い溝は計画線・仮工事によるのか。周溝内からは須恵器甕の口縁、坏蓋（第28図2、3）を中心として土師器片、縄文土器、石器が出土した。

#### 008号跡（土坑墓）

C3区に位置している。角の丸い長方形で南側にテラス状の段をもつ。長軸2.5m、短軸はテラスを含めて1.5m、テラスを含まないと1.2m、深さ0.4mを測る。西側を攪乱で削られている。覆土はよくしまっており上層はソフトローム粒と焼土粒を含む暗茶褐色土、下層は白色土粒を含む暗黄褐色粘性土であった。遺物は出土しなかった。

#### 009号跡（土坑墓）

B3区に検出した。いびつな台形を示し長軸2m、短軸1.7m、深さ0.4mを測る。西側を攪乱で削られている。南西側の壁は斜めにたち上がり、北東側の壁はオーバーハングしており、有天井土坑の形態をもつ。遺物は見つからなかった。覆土は南西側から急激に埋まっているが下の2層は焼土粒や炭化粒を含む。火葬によるものかと思われた。

#### 011号跡（土坑墓）

F3区の東斜面に検出された。角の丸い長方形を呈し北側にテラス状の段を持つ。長軸1.9m、短軸1.1m深さ0.2mを測る。上面のほとんどを削られて遺存状態が悪く床面もかなり凸凹が激しい。南側の壁がオーバーハングし、北側がなだらかに立ち上がる有天井土坑の形態を残している。遺物は見つからなかった。

#### 014号跡（土坑墓）

F3区の東斜面に検出された。楕円形を示し、長軸2m、短軸1.5mを測る。斜面に作られ遺存状態は非常に悪い。調査中に暗茶褐色土の床面を検出したが、雨で流失してしまった。実測できたのは流失した後の掘りかたの名残である。一度掘った土坑の底面に土を入れ直して床面を平らにしたと思われた。遺物は見つからなかった。

#### 015号跡（方形周溝状遺構）

F3区の東斜面に位置する。軸をほぼ南北にとり全体的に上面を道状遺構によって削り取られていた。表土除去作業中に注意したが、斜面下側は崩落して遺存していなかった。墳丘に1基、周溝内に1基土坑を検出したが、主体部と考えるには規模が小さすぎる。周溝は内径で5.4mを測り、ほぼ方形であるが、斜面で半分ほど消滅し斜めに上面が削られていることから、ゆがんだ形となっている。幅は最大で1.1m。周溝内からは破損後に砥石に転用された須恵器片1点が出土した。

#### 020号跡（土坑墓）

D3区で005号跡に絡んで検出された。長方形を示す長軸1.8m、短軸1.2m深さ0.2mを測る。床面はほぼ平らで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は暗黄褐色土ブロックを含む暗茶褐色土であった。遺物は見つからなかった。

#### 021号跡（階段状遺構）

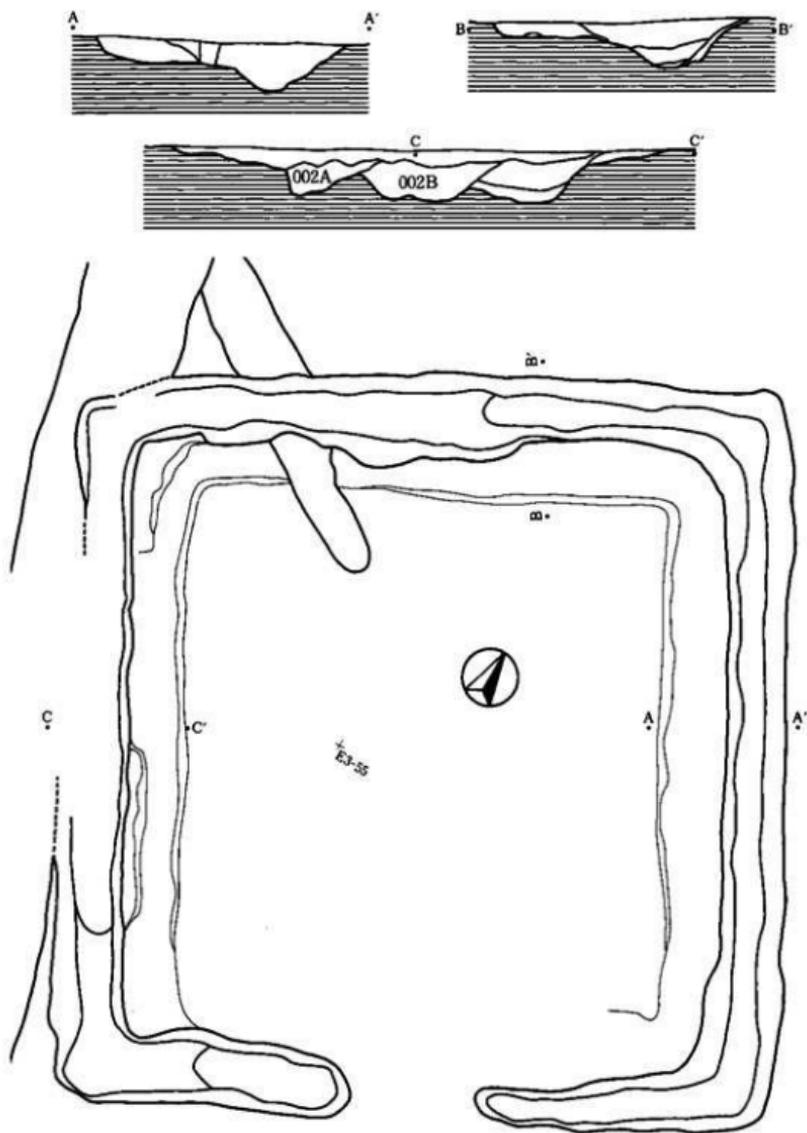
F3区の東斜面を南東から北西に向かって登るように作られている。平面は溝状遺構のようだが底面は一部の攪乱を除き階段状になっていた。方向は001号跡と平行し、これに伴う遺構かもしれない。

#### 029号跡（土坑墓）

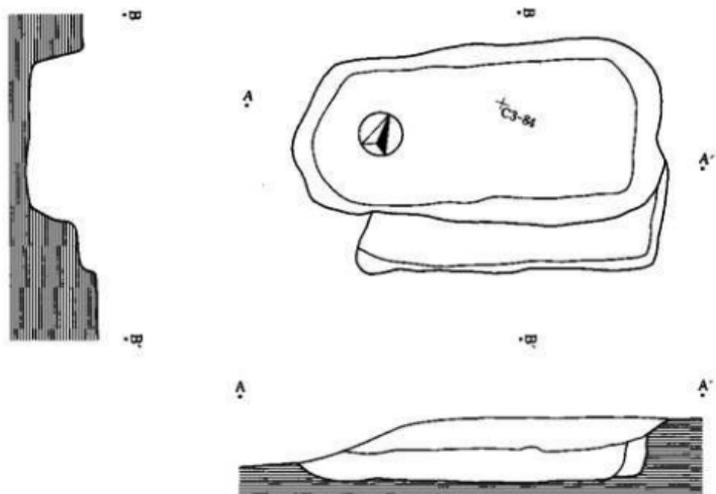
F3区の東斜面の肩から検出された。角の丸い長方形を示し、長軸2.3m、短軸1.1m、深さ0.1mを測る。床面はほぼ平らだが依存状態は悪い。覆土は白色粘土粒を含むよくしまった暗茶褐色土である。遺物は見つからなかった。

#### 030号跡（土坑）

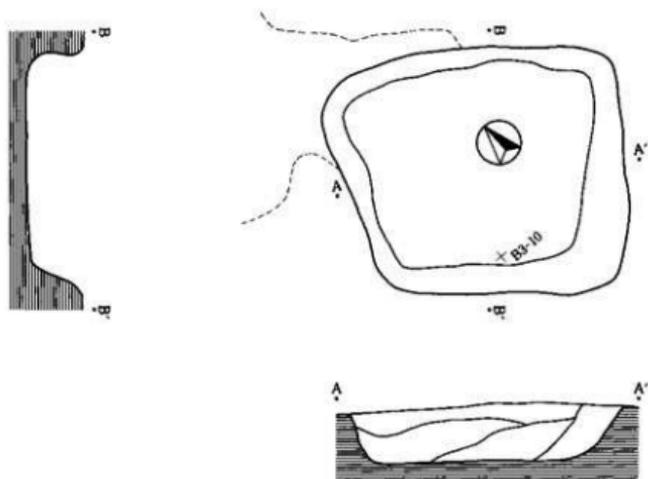
F3区の東側の斜面に検出された。円形を呈し、直径1.4m、深さ0.2mを測る。ほぼ中央を山芋掘り穴に攪乱されている。床面は皿状になっていたものと思われる。覆土は白色粘性土粒を多く含む暗茶褐色粘性土であった。遺物は見つからなかった。



第21図 001号跡平面図(1/100)・セクション図(1/50)

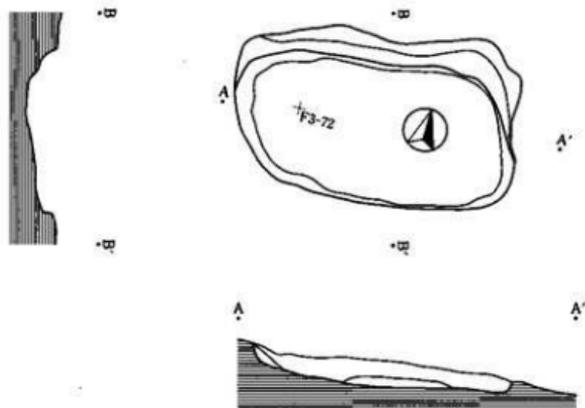


008号跡(1/40)

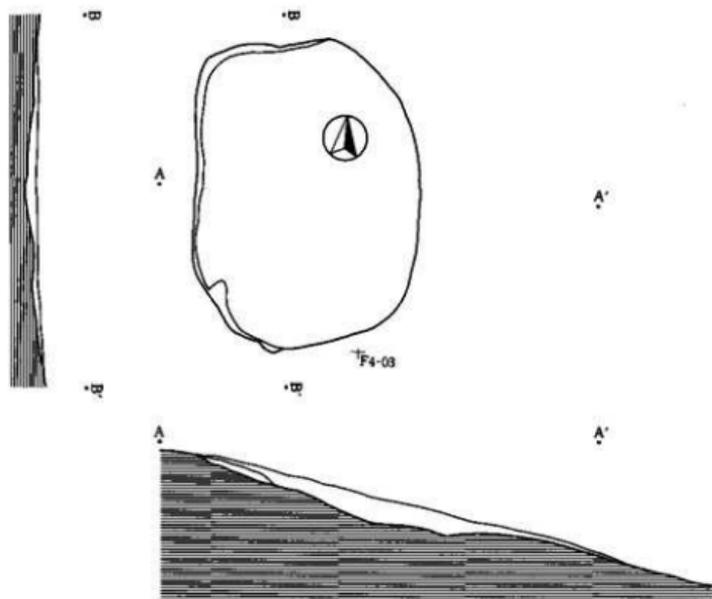


009号跡(1/40)

第22図 008、009号跡平面図・セクション図・エレベーション図

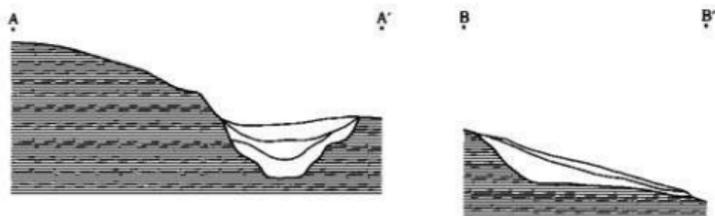
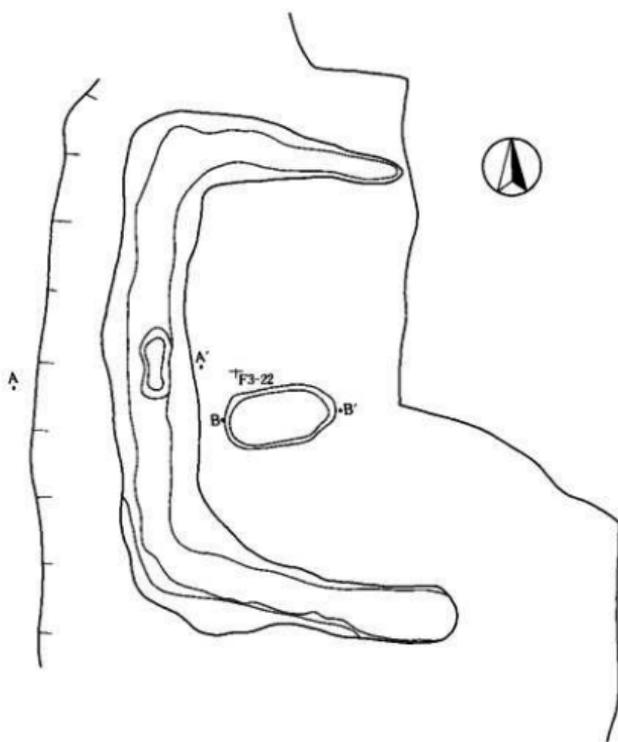


011号跡(1/40)

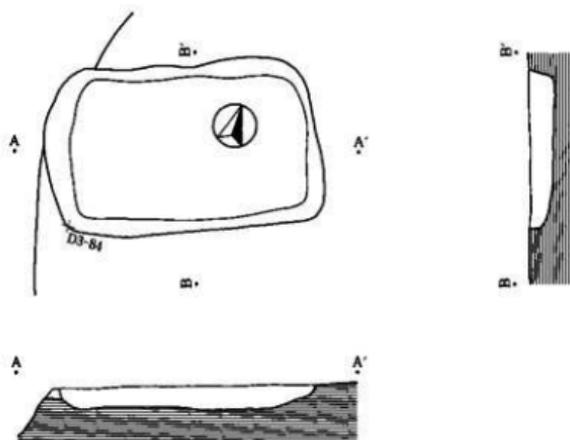


014号跡(1/40)

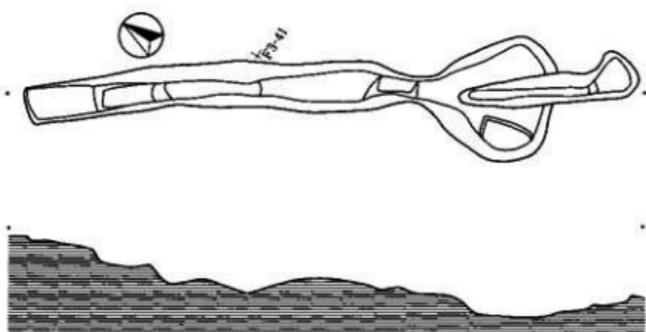
第23図 011,014号跡平面図・セクション図・エレベーション図



第24図 015号跡平面図(1/80)・セクション図(1/40)

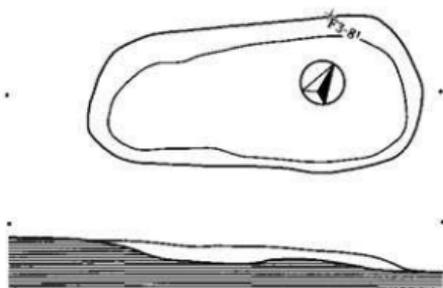


020号跡(1/40)

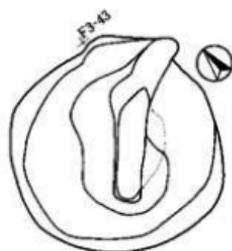


021号跡(1/80)

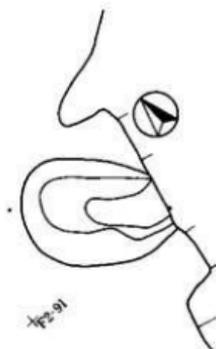
第25図 020,021号跡平面図・セクション図・エレベーション図



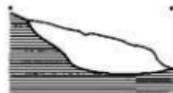
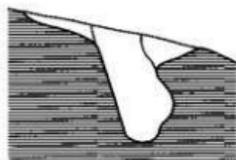
029号跡(1/40)



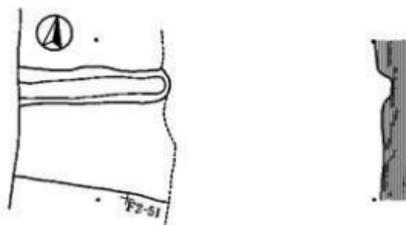
030号跡(1/40)



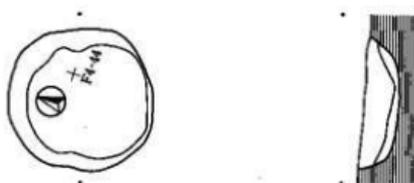
031号跡(1/40)



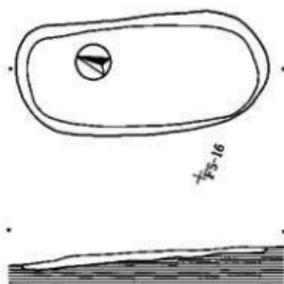
第26図 029,030,031号跡平面図・セクション図



038号跡(1/100)



040号跡(1/40)



041号跡(1/40)

第27図 038,040,041号跡平面図・セクション図・エレベーション図

### 031号跡（土坑）

F2区の東斜面に検出された。角の丸い長方形のようだが東側は土の崩落によって壊されている。長軸1m、短軸0.7mを測る。北西壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がる。床面は平らである。覆土は白色粘性土粒を多く含みよく締った暗茶褐色土であった。遺物は見つからなかった。

### 038号跡（溝状遺構）

F2区の東斜面やや北側に検出された。南側に浅い溝、北側に深い溝をもつ、2段構造となっていた。調査区にかかった部分が少なく、東側を攪乱されているので、性格がつかめない。調査中は遺構の断面が001号跡に似ているので、方形周溝状遺構の北側の周溝としてとらえたが、遺物も見つからなかったので、溝状遺構として報告する。今後その続きが調査され、明らかになるであろう。

### 040号跡（土坑）

F4区の南東側の埋没谷の肩部に検出された。円形を示し、直径1m、深さ0.2mを測る。覆土は暗茶褐色土であった。遺物は見つからなかった。

### 041号跡（土坑墓）

F5区の埋没谷の肩に検出された。角の丸い長方形を呈し、長軸1.8m、短軸0.8m、深さ0.2mを測る。床面は地形に沿ってやや北に傾いているが、平らであった。覆土は赤色粒を含む粘性の強い暗茶褐色土であった。遺物は見つからなかった。

## 2 遺物（第28図）

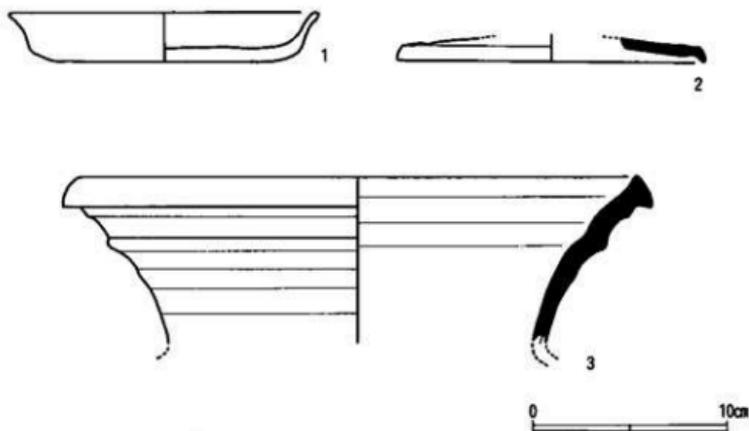
該期の遺物は少ない。遺構出土のものと遺構外のものを一括して報告する。

1は土師器坏で摩耗が激しいため内外面の調整は明らかでないが、外面下半分は黒色化してすず状の物が付着している。012号跡（古墳時代）の攪乱から出土した。2は須恵器蓋で、器高は低く、つまみ部は失われている。端部を下方に屈曲させているが、作りは雑で、やや外側に開き気味になっている。外面屈曲点の稜もだらけ、全体的に厚みがあり、先端部も鋭がない。色調は明るい灰白色で胎土は白色砂礫粒と黒色粒を含む。天井部に自然釉が散っている。001号跡から出土した。3は須恵器壺の口辺部で口縁部端面はやや張るものの、平らな面に仕上げしており、端面上下端の稜も鋭く作られている。口縁部下には断面三角形の稜がめぐるが、稜先端の鋭さはない。色調は明灰白色で、胎土は細密で白色砂礫粒と黒色粒を含む。また、口

縁部内面に薄く自然釉が散っている。001号跡から出土した。

### 3 歴史時代のまとめ

古墳時代に墓域としての性格を与えられた調査区周辺はその後その性格を維持したようである。歴史時代のものと思われる遺構の中心となるものは、方形の周溝をもつ001号跡、015号跡の墓と、付属の施設をもたない008、009、011、014、020、019、041号跡などの土坑墓群である。遺物が非常に少なく断定はできないが、おおむね古墳時代から引き続き、7世紀後半までに比定される。土坑墓についてはまったくといっていいほど遺物が見つからなかったし、遺存状態の悪いものが多いが、008、009、011号跡のような有天井土坑の形態が見てとれるものがあった。これら歴史時代の墓のほとんどは調査区東の平場から斜面にかけて作られており、調査区中央の円墳や土坑墓を避けている。円墳の盛土が明確に残っており単純にそれらを避けたか、形態こそ違え、墓であることに畏敬を示し切り合うことを避けたのかはわからないが、古代から、歴史時代にいたる、占地の方法が興味深い。遺構の密度が比較的薄く調査も中台A遺跡のごく一部を調査したにすぎないので答えを出すことはできないが興味のあるところである。



第28図 歴史時代遺物実測図(1/3)

## VI 近 世

### 1 遺構

#### 002A号跡(溝)・002B号跡(溝)

調査区のやや東側E3区、E4区をN-15°-Wに横切る溝でかさなっている。地形に沿って北から南に傾斜している。北の調査区の外からはじまり、南側は調査区内で直角に東において急激に埋没谷に水が流れ込まないような形になっている。002A号跡は最大幅0.8m以上、断面は箱形あるいはいびつなV字を呈している。一方002B号跡は、002A号跡とかさなりながら、やや東に位置しなだらかな断面を示すが、002A号跡によって切られている。共にきめ手になる遺物を出土しなかったが、新しい002B号跡は宝永富士テフラが大量に含まれていた。

#### 004号跡(溝)

E4区に位置する。長さ12.5m、幅1.7mであった。底面は平らでなく、一部にくぼみが見られた。覆土に宝永富士テフラが含まれていた。

#### 010号跡(溝)

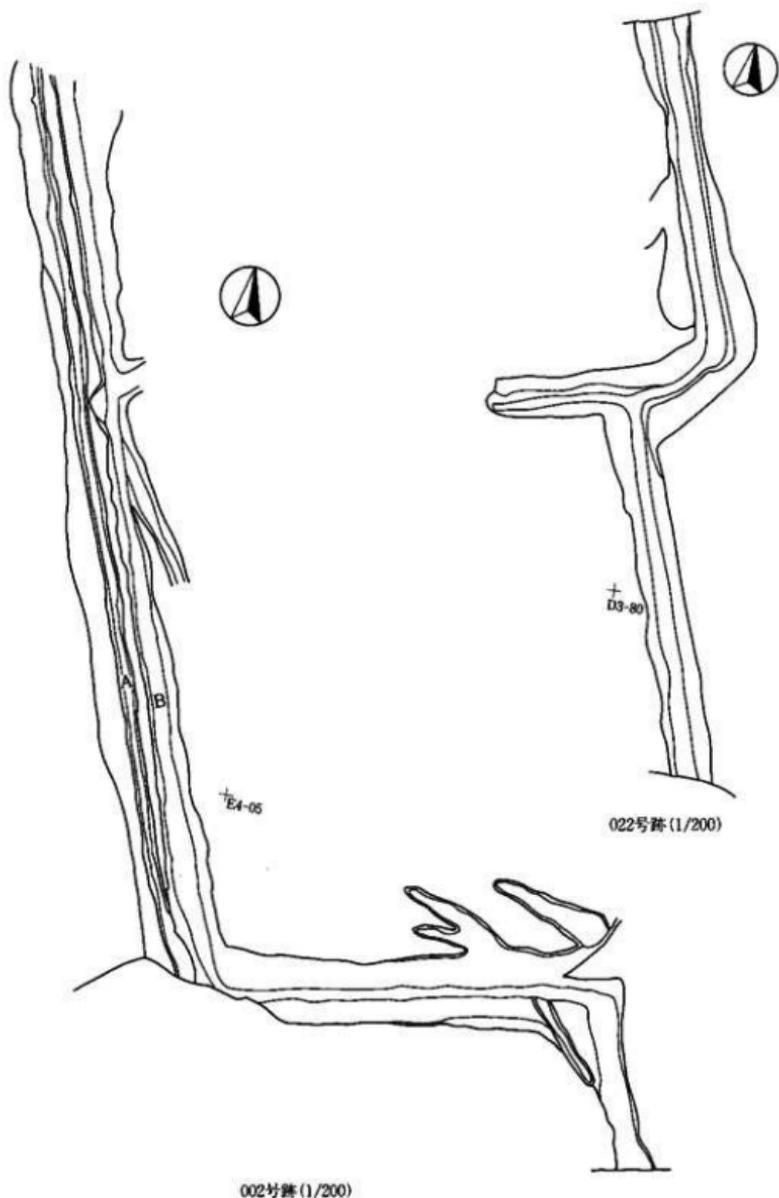
B3区に位置し、N-15°-Wに軸をとる溝である。北側を攪乱で大きく失っているし、上面もかなり削られてしまっているので平面形はコルネのような不整形を示す。長さ6.4m、幅1.3m、深さ0.2m。覆土はローム粒、白色粘土粒を含むよくしまった暗茶褐色土であった。遺物は見つからなかった。地割と方向を一にし、覆土に砂を含まない。江戸時代前半のものと思われる。

#### 016号跡(溝)

C3区に位置し、007号跡を切っている。長さ6.6m、幅0.6m、深さ0.3mを測る。断面はU字型を示し、覆土は砂を含んだ暗茶褐色土。遺物は見つからなかった。位置的に022号跡に規制されており、同じ時期かそれ以降と考えられる。

#### 022号跡(溝)

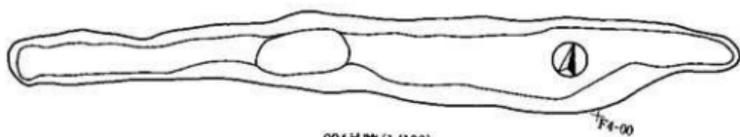
D3区に位置する。調査区北側から南南東に進み、途中でクランク状に曲がってさらに南に至る。U字形の溝である。現在の地割り線と位置・方向を一にするが、調査区外の地割は土手状になっている。この地割は旧宅の敷地と一致し、その境を示すと同時に特にクランクから南



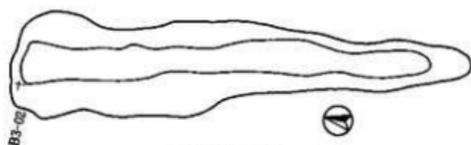
002号踪 (1/200)

022号踪 (1/200)

第29图 002、022号踪平面图



004号跡 (1/100)



010号跡 (1/80)



016号跡 (1/80)



023号跡 (1/80)

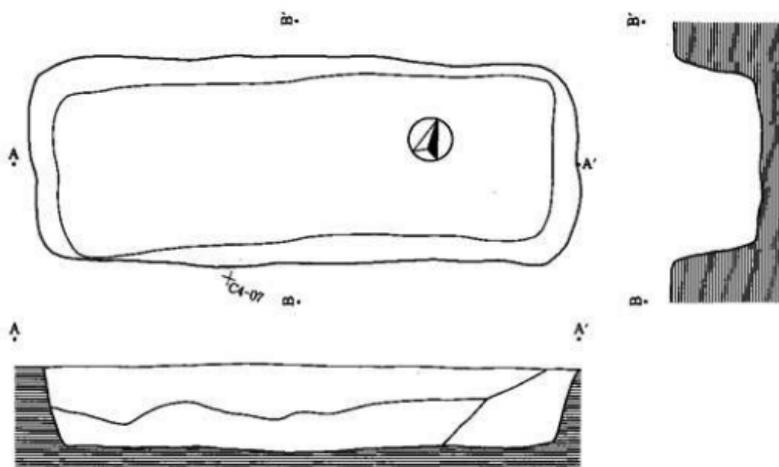


025号跡 (1/80)



026-027号跡 (1/80)

第30図 004, 010, 016, 023, 025, 026, 027号跡平面图



第31図 045号跡平面図・セクション図・エレベーション図(1/40)

の部分については、水を南に流す排水路としてあったものが土手につくりかえられたものと思われる。覆土に砂を含む。遺物は素焼の内耳土器片を多く出土した。

#### 023号跡（溝）

016号跡の南に方向を一にして検出した。長さ6m、幅0.6m、深さ0.3mを測る。断面は皿型を示し、覆土は黒色土粒・砂を含む締まりのない暗茶褐色土であった。東側を攪乱によって失っている。遺物は見つからなかったが、覆土の状態から016号跡、022号跡よりもなお新しいと考えられる。

#### 025号跡（溝）

D3区に位置する。長さ6.6m、幅0.4m、深さ6cmを測る。断面はごく浅い皿型を示し、覆土は締りのある暗茶褐色土であった。非常に浅いため、砂を含んでいるかはわからなかった。

#### 026号跡（溝）

D3区の025号跡の東側に検出された。長さ2.2m、幅0.6m、深さ0.2mを測る。断面は浅い皿型。覆土はやや締まりのある暗茶褐色土であった。遺物は見つからなかった。

#### 027号跡（溝）

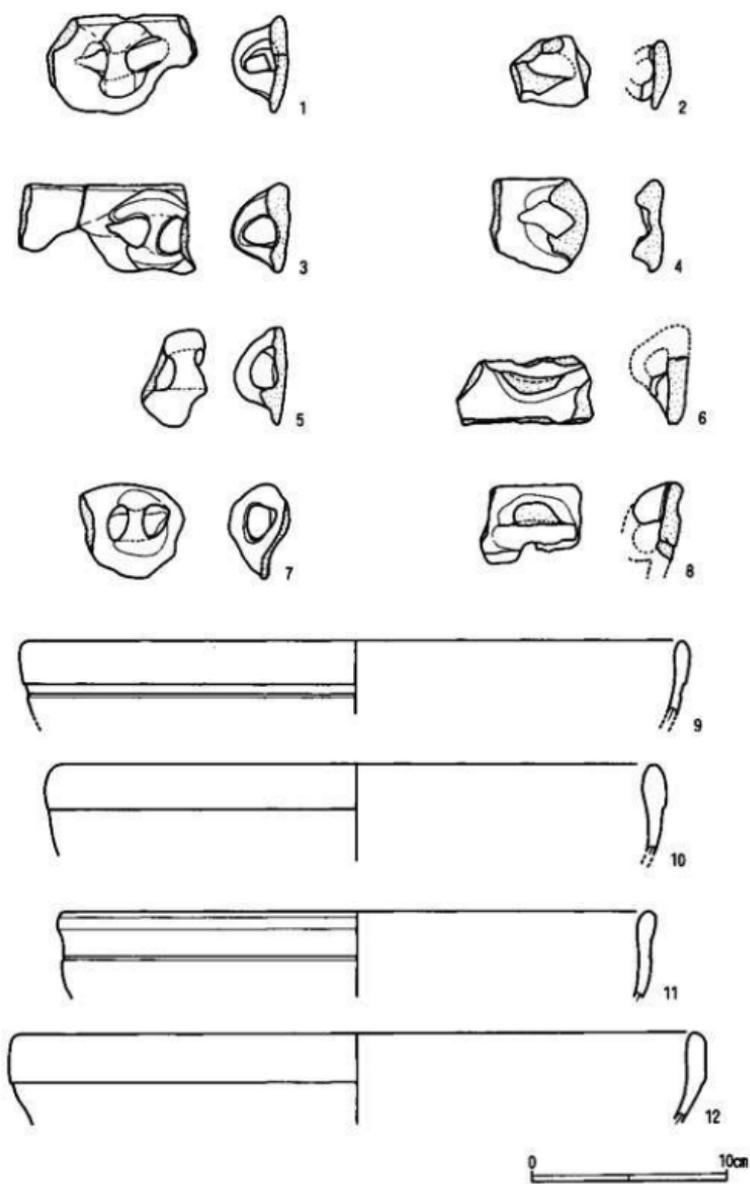
D4区の026号跡の延長に検出された。長さ2.8m、幅0.7m、深さ0.2mを測る。断面は浅い皿型。覆土は白色粘性土を含む暗茶褐色土。遺物は見つからなかった。覆土の状態が異なるので026号跡と分けて調査したが、地山から白色粘性土が混入したと考えられ、本来つながった溝であったと考えるべきであろう。

#### 045号跡（土坑）

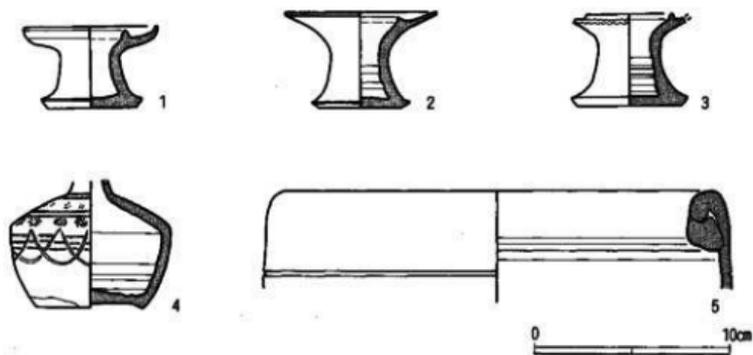
C3区に位置し、長方形を呈す。3.7m×1.4m、深さ1.2mを測る。底面は硬く締まっている。土坑としてはかなり大きく、覆土は、砂を含む暗茶褐色粘性土を中心に他の遺構と比べて締まりがないので比較的新しい貯蔵穴と考えられる。

## 2 遺物（第32・33図）

022号跡を中心に素焼の内耳土器片を採集した。また、西側斜面の崩落土中から仏具や火鉢を見つけたので報告する。



第32图 素烧土器实测图(1/3)



第33图 仏具等実測図(1/3)

### 3 近世のまとめ

近世の遺構と考えられたものの中には新しい遺物が混入し、時期がとらえにくいものがあったが、地割り線との関係や覆土の状態から、調査中に判断できたものもある。まず、明らかに近世ととらえられたのは、002A号跡であるが、これは覆土に宝永富士テフラが多量に含まれていたため、テフラ降下後比較的早いうちに埋まったことがわかり、最終時期は江戸時代中期とした。004号跡も覆土にテフラを含んでいた。002B号跡はそれよりも古い。この二つは地図に残る地割り線と方向は一にするが、位置までは同じでなく、同じ近世でも位置も同じくする022号跡などはさらに新しい。023、025、026号跡などは位置は同じでないが明らかに022号跡に規制された配置となり、022号跡と同じかさらに新しいと思われる。一方、覆土に注意すると新しいと思われる遺構の覆土は表土に性格が近く、砂がやや多く含まれている。古墳時代から歴史時代および002B号跡の覆土には見られない。テフラが大量に供給され、表土に混入したためと思われる、この覆土は002A号跡以降といえる。045号跡がそれにあたり、016、027号跡にその傾向が見られる。

## Ⅶ 時期不明

### 013号跡（土坑）

調査区西側A3区に位置する。遺構検出時には009号跡と絡んで見つかった。直径0.5mほどの円形を呈し深さは0.2mを測る。調査時点では覆土の状態が似ているので009号跡との関連が考えられたが、この周辺は上面を大きく削り取られているのでもとの形はどちらかという深いピットのようなものが想定され別なものと考えた。遺物は見つからなかった。

### 017号跡（土坑）

D3区に位置する。円形を示し直径1m、深さ0.4mを測る。覆土は粘性の強い暗茶褐色土であった。遺物は見つからなかった。

### 024号跡（溝状遺構）

C3区に検出された。ほぼ東西にはしり周辺の遺構と方向を異にしている。長さ6m、幅1.2m、深さ0.3mを測る。断面は皿型。覆土は暗黄色土粒を含む暗茶褐色土であった。遺物は見つからなかった。

### 028号跡（道状遺構）

F3区の東斜面の肩の部分に検出された。縁辺部を削り出し段をつくっている。この周辺は土の崩落が激しく、本来の姿が片側の段だけなのか、溝状遺構であったものが片側のみ崩落したものか不明である。また、この段は北、あるいは南にのびているが、崩落したものと混同を避けるために明らかに削り出されたと思える部分だけ記録した。

長さ13.6m、幅1.5m、覆土は平場から流れ込んだように堆積し、その上はやや新しい平場を広げるように盛土が厚く堆積していた。

### 032号跡（溝状遺構）

E3区に検出された。001号跡、002号跡に切られている。長さ6.8m、幅1m、深さ0.2mを測る。覆土は赤色粒を含む暗茶褐色粘性土であった。遺物は縄文土器片が若干出土した。方向などに類似するものが見当たらないが、覆土のようすは034号跡などと似ており、比較的古いものと思われる。

### 033号跡（溝状遺構）

F5区に検出された。長さ9.2m、幅1m、深さ0.3mを測る。断面はほぼV字型で、覆土は

赤色粒を含む暗茶褐色粘性土であった。北西端はなだらかに消えているが、南東端は深くまっているにもかかわらず、とぎれている。西側に折れ曲がっているのかもしれないが調査区外に出てしまうので不明である。遺物は縄文時代の土器片が少し出土した。

#### 034号跡（溝状遺構）

F4区に検出された。ほぼ東に斜面に向かって作られていたようだが斜面側は002号跡に切られている。長さ4m、幅1.2m、深さ0.2mを測る。断面は皿型を示す。覆土はよく締まった暗茶褐色粘性土である。遺物は縄文土器片が少々出土した。035号跡、036号跡とともにその他の遺構には見られない現地形に合致しないつくられ方で、かなり古いものではないかと思われた。当然平場から外に水を排出する目的で作られたものと思われるが、002号跡などと比べると排出する方向が異なる。

#### 035号跡（溝状遺構）

034号跡の西側、E4区に検出された。長さ9.2m、幅0.6m、深さ0.1mを測る。なかほどを002号跡によって断たれている。034号跡と比べて方向はやや南寄りに傾いている。縄文土器片が少々出土したが、この周辺は縄文時代の遺物が出土し、また遺構が大変浅いので伴うものかどうかは判断できなかった。

#### 036号跡（溝状遺構）

035号跡の南側に検出された。長さ1.6m、幅0.4m、深さ0.1mを測る。東側は035号跡と絡むが新旧関係は不明であった。さらに002号跡によって切られている。遺物は出土しなかった。遺存状況が悪いが、方向は034号跡と似ており、035号跡とはやや異なっている。

#### 042号跡（溝状遺構）

F5区に検出された。この周辺は農道とかさなって深いわだちの跡があり、遺存状態が非常に悪いが、そのなかで明らかに覆土と思われるものをもつもの、掘り込みのしっかりしたものを調査した。

長さ3.8m、幅0.6m、深さ0.1mを測る。断面は皿型。覆土は赤色粒を含む暗茶褐色粘性土であった。

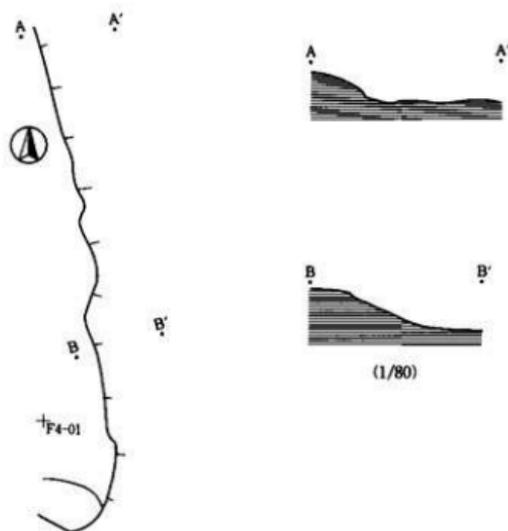
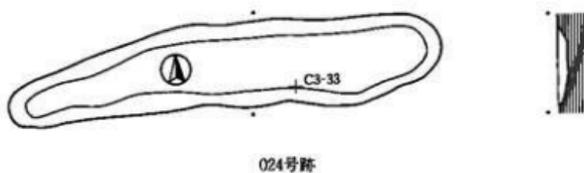
#### 043号跡（溝状遺構）

F5区に検出された。033号跡の東側に位置する。長さ7.2m、幅0.8m、深さ0.1mを測る。

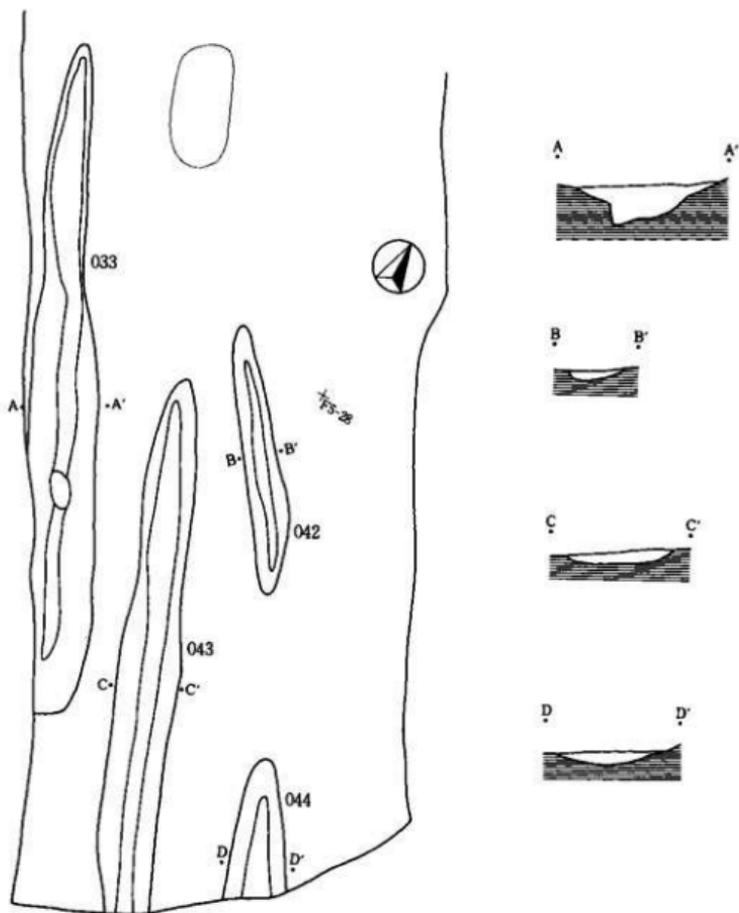
北西端はなだらかに消滅し、南東端は調査区外に消えている。断面は皿型で、覆土は赤色粒を少し含む暗茶褐色粘性土であった。遺物は見つからなかった。

#### 044号跡（溝状遺構）

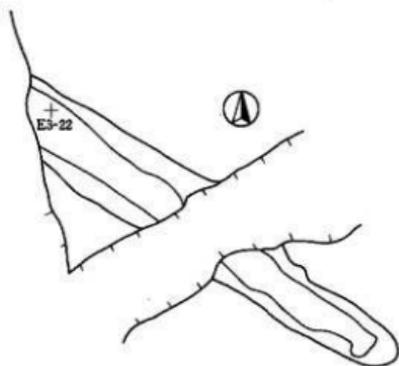
調査区南東端043号跡の東側に検出された。長さ2m、幅0.8m、深さ0.1mを測る。大部分は調査区外に出ている模様で全容はわからない。断面は皿型で、覆土は赤色粒を多く含む暗茶褐色粘性土であった。



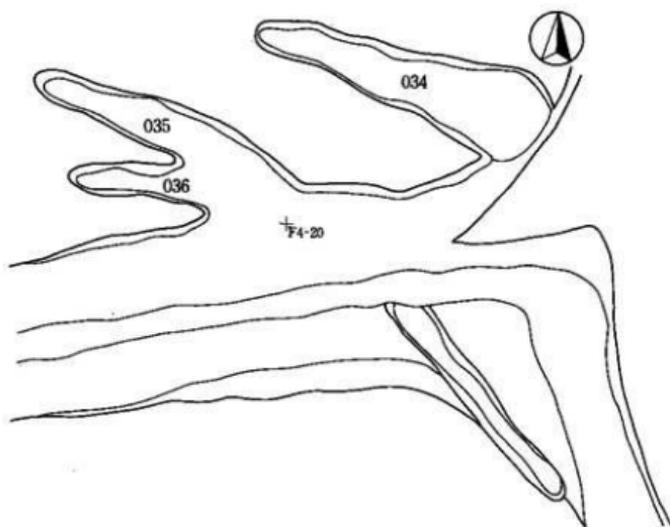
第34図 013,017,024,028号跡平面図・セクション図・エレベーション図



第35図 033, 042, 043, 044号跡平面図(1/80)・セクション図(1/40)



032号跡(1/80)



034, 035, 036号跡(1/80)

第36图 032, 034, 035, 036号跡平面图

# 写真図版

遺跡遠景(北から)



遺跡全景(西上方から)



遺跡全景(北上方から)





遺跡全景(上から)



上層確認調査状況



調査風景



下層堆積状況

001号跡全景



001号跡周溝セクション



001号跡全景(上から)



002号跡全景



002号跡セクション

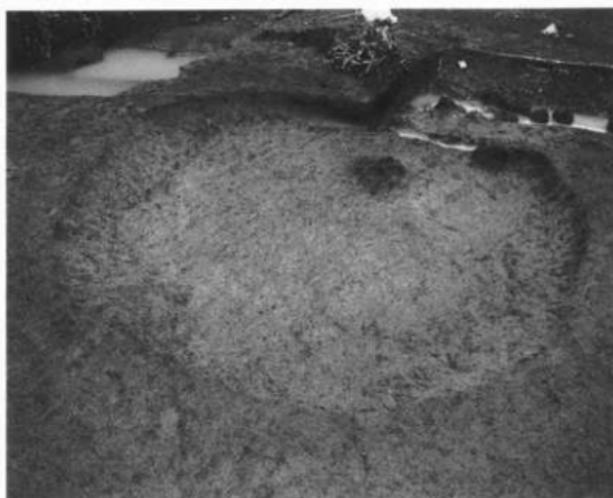


002号跡全景(上から)

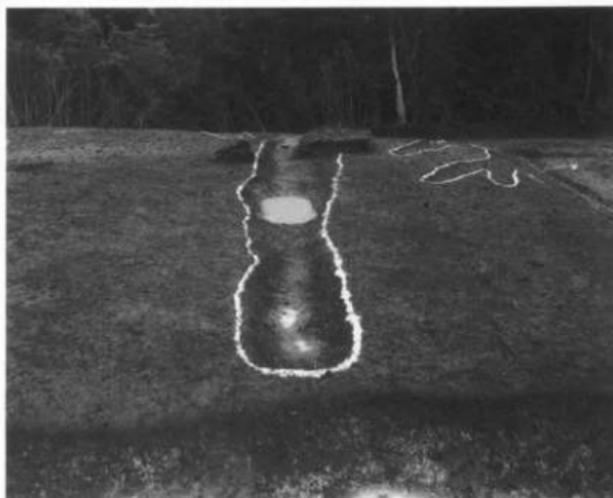




003号迹遗物出土状况



003号迹全景



004号迹全景



005号跡全景



006号跡全景



007号跡全景

008号迹全景



009号迹全景



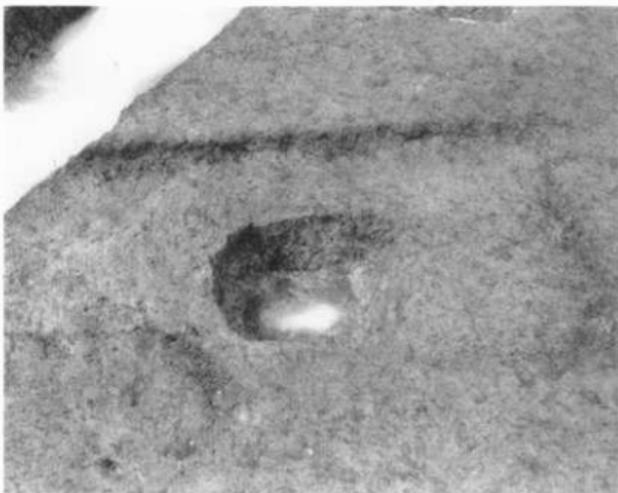
010号迹全景



011号迹全景



012号迹全景



015号迹全景



015号跡周溝セクション



018・019号跡全景



020号跡全景





021号跡全景



022号跡全景



023号跡全景

024号迹全景



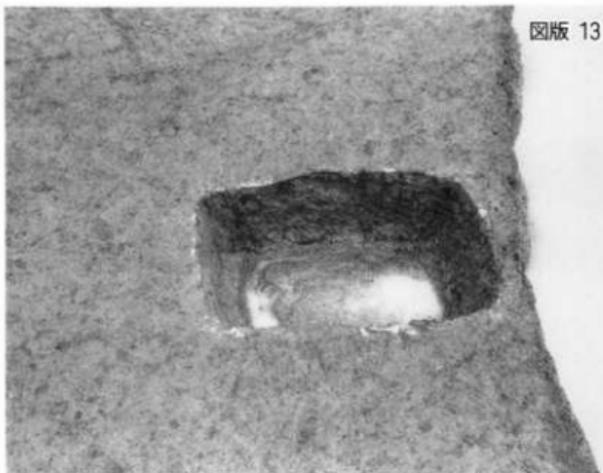
025·026号迹全景



021·029·041号迹全景



037号跡全景



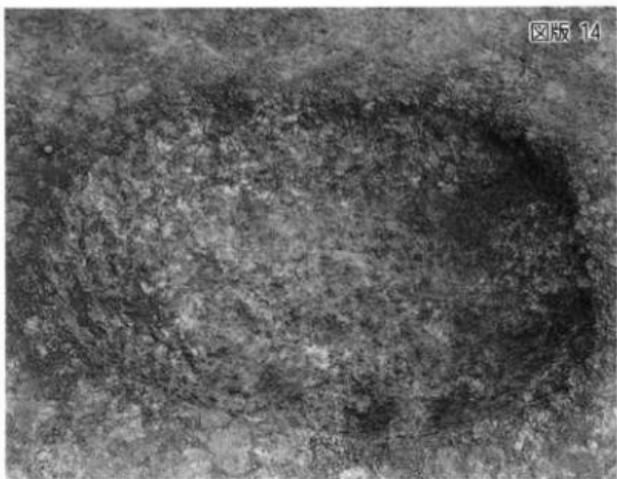
038号跡全景



039号跡全景



017号跡全景



041号跡全景

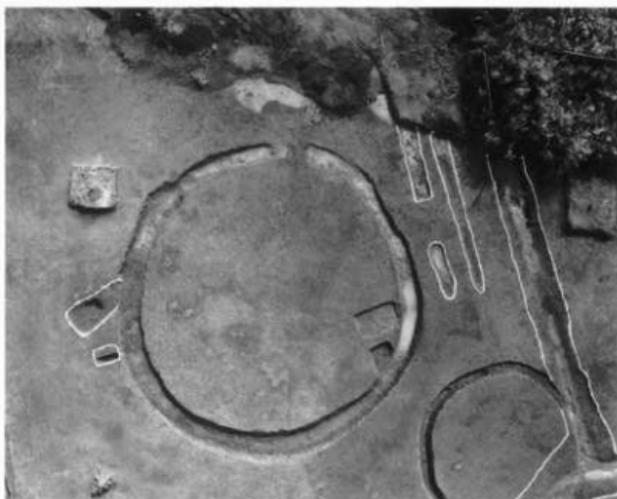


033·042·043·044号跡全景





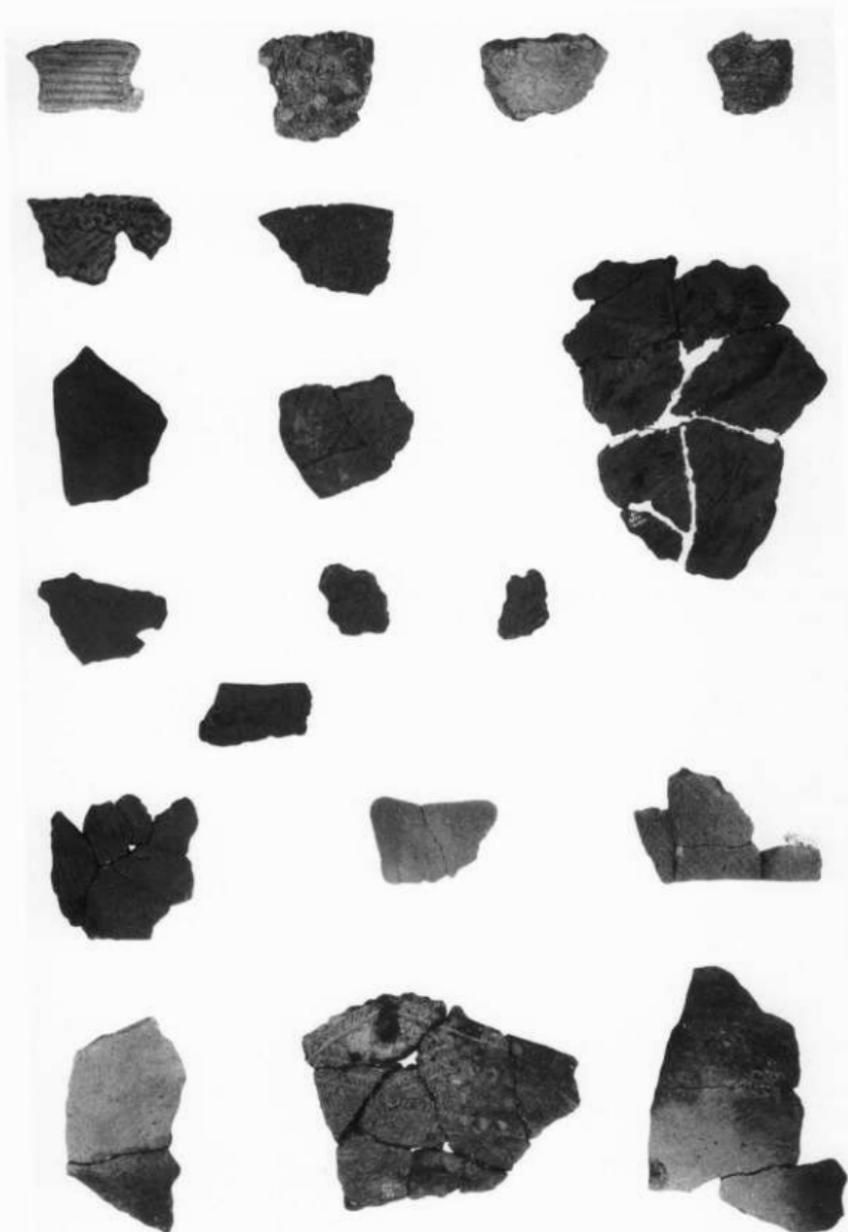
045号跡全景



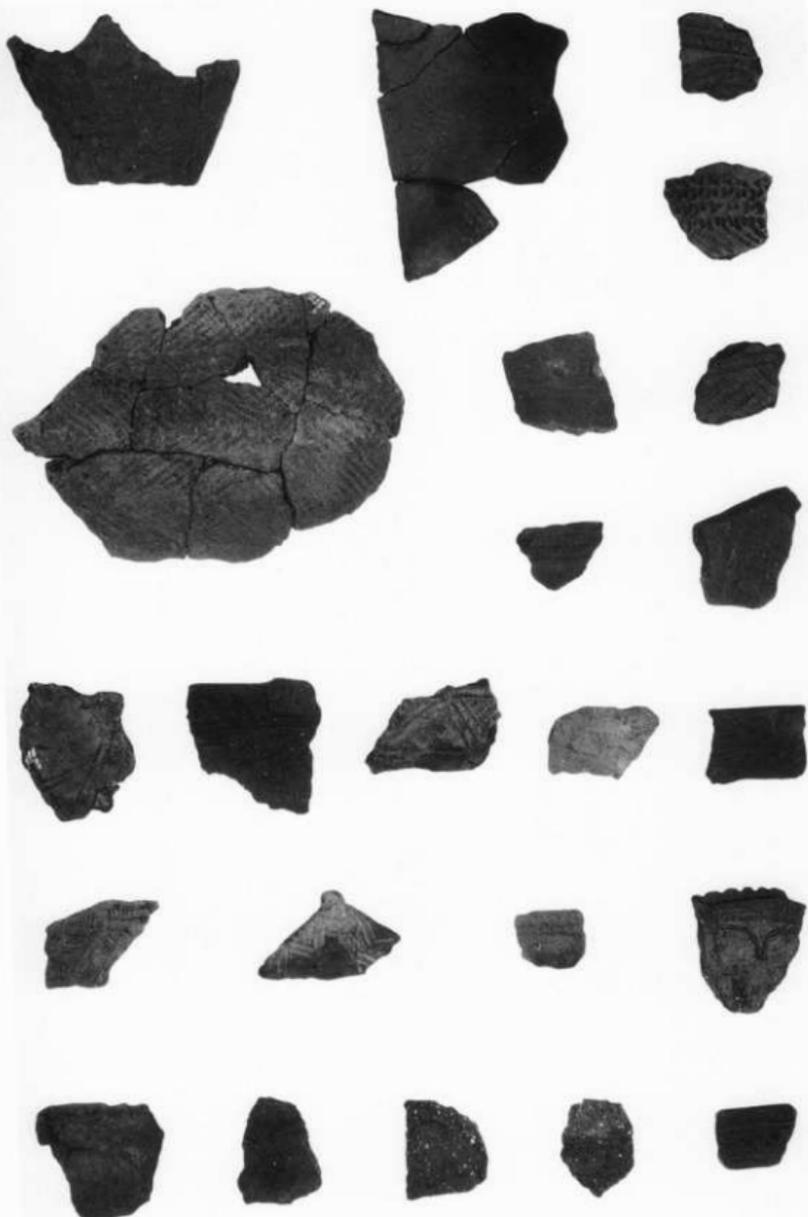
005号跡周辺



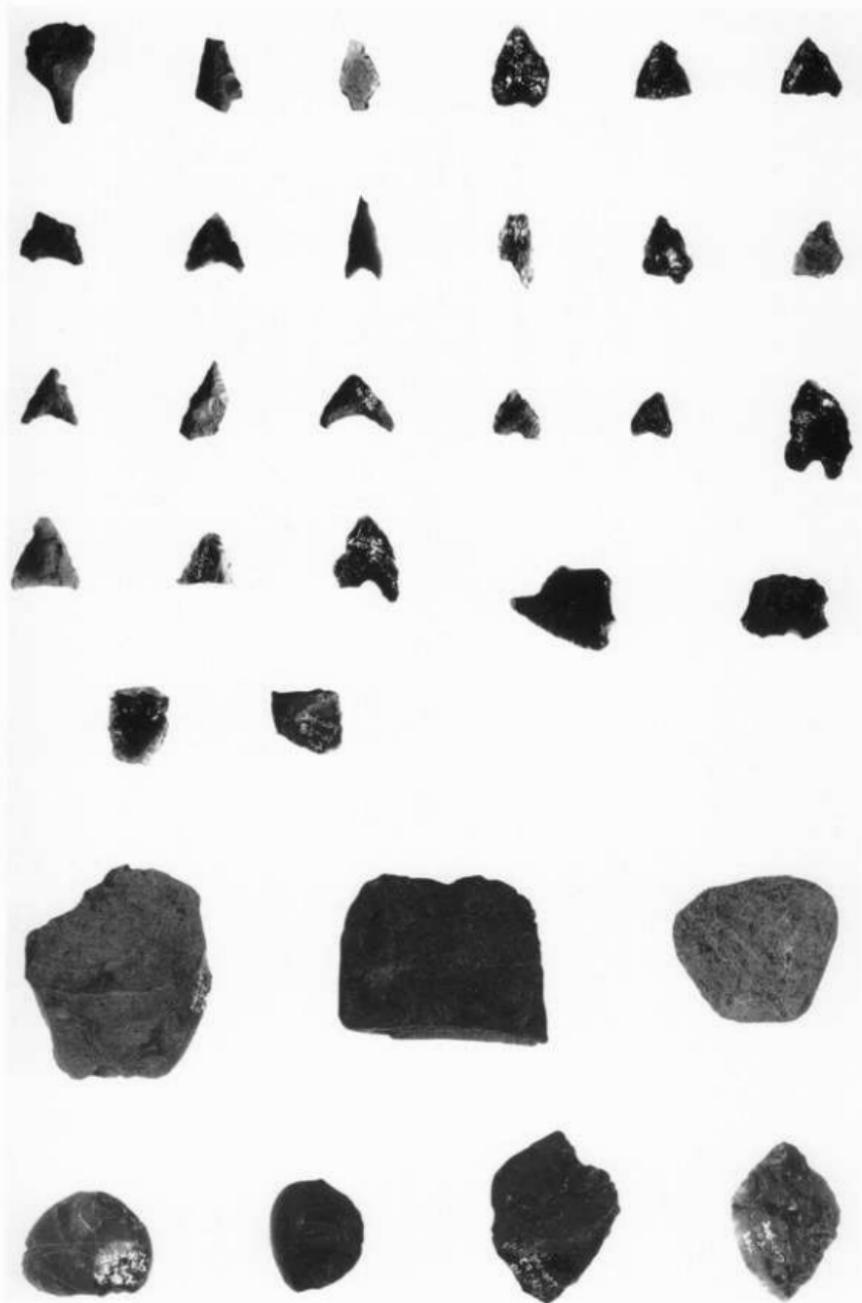
006号跡周辺



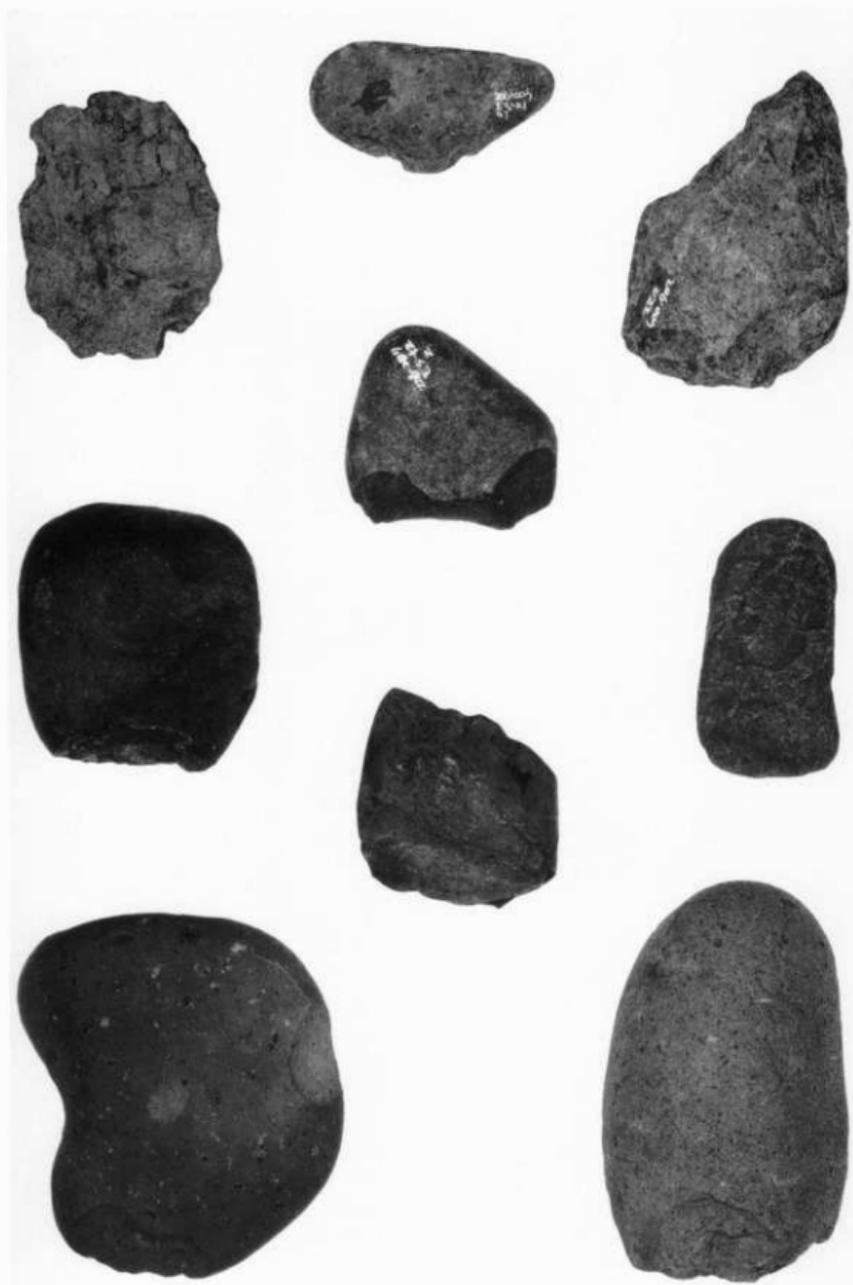
繩文土器片(1)



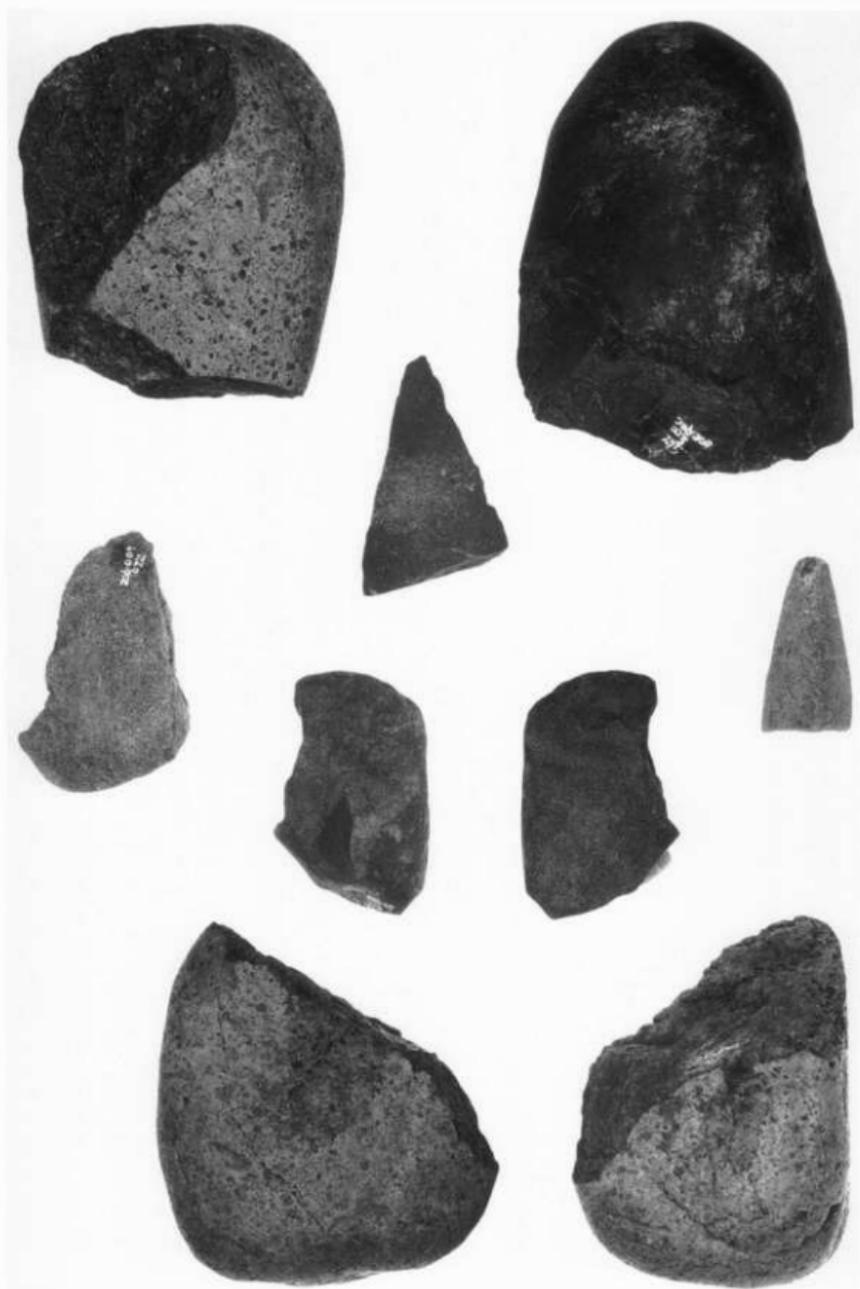
繩文土器片(2)



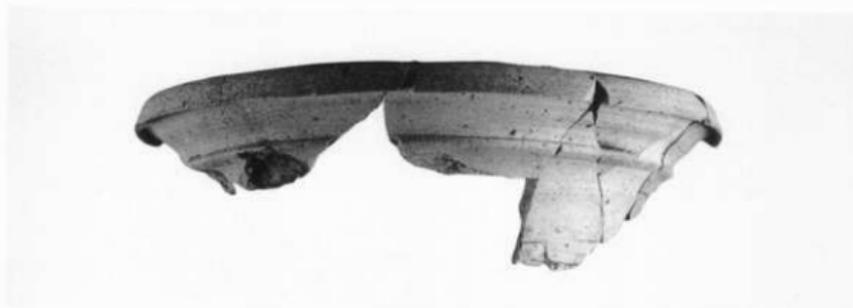
石器(1)



石器(2)



石器(3)



歴史時代土器



素焼土器



仏具

## 抄 録

フリガナ	ナカダイ エイイセキ
書名	中台A遺跡
副書名	一般国道409号道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻次	I
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	233集
編著者名	福田 誠
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡809-2
印刷所	大和美術印刷株式会社
印刷年月日	1993年3月25日
発行年月日	1993年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北 緯 東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺 跡				
ナカダイエイイセキ 中台A遺跡	ナカダイエイイセキ 木更津市笹子	206	007	35°23'6" 139°59'27"	19910601   19911031	2,980㎡	道路改良

所収遺跡	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項
中台A遺跡	包蔵地	縄文  古墳  奈良・平安	住居跡  円墳 住居跡 方形周溝 状遺構 土坑墓	縄文土器片 石器・刺片 土師器  須恵器片	古墳時代から奈良・平安時代にいたるまで墓域として営まれたやせ尾根の先端部

千葉県文化財センター調査報告第233集

中 台 A 遺 跡

—一般国道409号道路改良工事に伴う埋蔵文化財報告書—

---

平成5年3月25日印刷

平成5年3月31日発行

発行 千葉県土木部

千葉県中央区市場町1番1号

編集 財団法人 千葉県文化財センター  
四街道市鹿渡809-2

印刷 大和美術印刷株式会社  
木更津市潮浜2-1-10

---